

芸術祭三十年史

本文編

刊行にあたって

このたび芸術祭三十周年を記念して年史を編纂刊行する運びとなりました。

顧みますと、戦後の荒廃のさなかに発足した芸術祭も、さまざまな時代を経過し、そのときどきの世相を反映しながら今日に発展してきたもので、この三十年の時の流れを思うと、まことに感慨の深いものがあります。

いまや芸術祭は、芸術鑑賞の機会、芸術創造の場として大きな機能を果たし、芸術祭の名は、たとえば俳諧歳時記の季語として定着するほどに成長しております。

この時にあたり、芸術祭三十年の歩みをふり返り、その資料を整えておくことは、さらに今後の芸術祭のいっそうの進展をはかるうえにも、裨益するところ少なからぬものがあると考え、本書の刊行を企画したものであります。

幸い、すでに『芸術祭十五年史』が刊行されており、このたびは後期十五年に重きをおきながら、編集をすすめることができました。すなわち、本書は、本文篇と資料篇（上・下）をもって、芸術祭の三十年の歴史が鳥瞰できるところに配慮したものであります。

本書の編纂については、第三十回芸術祭の終了とともに着手し、準備をすすめて参りましたが、限られた期間内に膨大な資料の整理等を行なわざるを得なかった関係上、なお、不備の点があることは免れません。

しかし、本書が芸術祭の貴重な記録として、いささかなりとも関係各方面の参考となり、また、資料として活用されれば、まことに幸いであります。

おわりに、本書の刊行にあたり、ご多忙のなかをさまざまな御協力をいただいた、編纂委員ならびに御執筆者各位に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和五十一年十二月

文化庁文化部長

鹿 海 信 也

芸術祭三十年史編纂委員

宮	本	北	福	南	鳥	登	戸	田	高	小	吉	江	内	今	蘆
沢	田	條	田	江	羽	川	板	辺	橋	泉	川	口	村	井	原
縦	安	明	安	治	幸	直	康	秀		文	英		直	欣	英
一	次	直	男	郎	信	樹	二	雄	博	夫	史	博	也	三	了

編集事務局(文化庁文化部芸術課)

白石	横山	初見	北橋
明教	立身	忠男	徹
	田中	小島	
北村	英機	哲	
美和			

芸術祭三十年史の手引

一、本書は本文編、資料編(上・下)の全三巻をもって構成する。

二、本文編は、芸術祭三十年の通史、芸術祭各部門の流れ、芸術祭随想および座談会・芸術祭あれこれを収載し、芸術祭の三十年間を鳥瞰した。なお、口絵写真は主催公演、協賛公演、芸術祭受賞作品等のうち、本文に記述のあるもの、また、そのときどきの大きな話題になったものを主に収めた。

三、資料編は、芸術祭主催公演、協賛公演、参加公演(作品)記録および受賞者一覧その他の芸術祭関係資料を収めた。なお、編集上の便宜で、芸術祭前期二十年(昭和二十一年～同四十年)を上巻、後期十年(昭和四十一年～同五十年)を下巻とした。

四、資料編上巻のうち、前期十五年間の記録は、既刊『芸術祭十五年史資料編』を縮約して収載した。詳しくは前書に拠りたい。

芸術祭三十年史・本文編

目次

口絵・芸術祭三十年史アルバム
刊行にあたって
芸術祭三十年史編集委員名簿
芸術祭三十年史の手引

第一章 芸術祭三十年の歩み(北條明直)

第一回芸術祭	7
第二回～第四回芸術祭	10
第五回芸術祭	14
第六回芸術祭	16
第七回芸術祭	19
第八回芸術祭	23
第九回芸術祭	25
第十回芸術祭	28
第十一回芸術祭	30
第十二回・第十三回芸術祭	33
第十四回芸術祭	37
第十五回芸術祭	39

第二章 芸術祭各部門の流れ

△演劇部門▽	
大劇場演劇(戸板康二)	109
新劇(茨木 憲)	115
△音楽部門▽	
邦楽系の流れ(吉川英史)	122
洋楽系の流れ(宮沢謙二)	128
△舞踊部門▽	
舞踊界三十年(江口 博)	136

第三章 芸術祭随想

△能楽部門▽	
能楽界動向(丸岡大二)	145
△大衆芸能部門▽	
一部・寄席芸を中心に(高橋 博)	153
二部・ポピュラー界ほか(盧原英子)	158
△映画部門▽	
その消長の軌跡(登川直樹)	163
△ラジオ部門▽	
後期十五年の流れ(伊馬春部)	175
△テレビ部門▽	
テレビ二十年の起伏(加藤守雄)	183
△レコード部門▽	
レコード文化への強力な刺激(田辺秀雄)	196
△民俗芸能部門▽	
民俗芸能の公開と保存(本田安次)	206
アジア民族芸能祭(小泉文夫)	210
芸術祭と国立劇場(森 晋六)	213
移動芸術祭(初見忠男)	222

第四章 座談会・芸術祭あれこれ

座談会(内村直也 河内正三 草壁久四郎 仁村美津夫 福原信夫 藤田洋 古谷系子 鹿海信也)	261
座談会のあとで(鹿海信也)	287
編集後記(北橋 徹)	293

芸術祭三十年の歩み

第一回 芸術祭

△芸能文化の狼煙▽

「今や我が国はボツダム宣言の趣旨に則り一切の軍国主義的色彩を払拭して民主主義的文化国家を建設する方図を定めました。絢爛たる文化の伝統を誇ってゐた日本が十年の長きに渡って武力を備へ、戦ひを事としてゐたことは決して国民の意志でもなければ、希望でもありません。そして国民の意志と希望は敗戦といふ代償を支払はねば購えなかつたのであります。惨憺たる焼跡の町にあって、様々な災難が我々を圍繞して居ります。然し伝統に養はれた文化的能力のみはなほ衰へずして様々な艱難の中に息づいてゐます。このやうな芸能文化を一堂に集めて鑑賞し、再認識し、再検討することは、終戦後漸く祖国再建に立ち上つた国民に必要且有意義なことと思ひます。古き文化を保存し、新しき文化を昂揚する芸術祭の催しは国民を鼓舞し明日の建設のための力を養ふに足りる企てだと信じます。過去現在の文化の総決算とでもいふべき芸術祭は明日の文化創造の礎でなければなりません。この意味に於きまして、帝劇、東劇の両舞台を使って全芸能団体及び芸能人を総動員した芸術祭を開催して新日本文化再建に寄与すると共に国境を越へて現代日本の精華を海外に宣揚せんことを期する次第であります。」（原文のまま）

終戦直後、文部省社会教育局の中に、芸術課という課が、初めて誕生した。「民主主義的文化国家を建設する方図」

から生まれたこの課の初代課長に、民間人から作家の今日出海氏が起用された。そして、同氏の創意によって、昭和二十一年、芸術祭は始められた。冒頭の趣旨が、当時の時代の様相と芸術祭のねらいを伝えている。

敗戦の全く混乱の中にあつて、芸能文化の狼煙をあげ、日本の芸能を一堂に会せようとした構想は、卓抜なものがあるといつていい。しかしそのすぐれた発想も、現実これを実行するとなると、多くの紆余曲折をまねがれなかった。特にこの催しを主唱する文部省側が、実行予算というものを全くもたず、ただ芸能界に協力を求めるしか方法がなかったことが、最大の難点だったといえよう。

△実施計画▽

実施の計画は、芸術祭執行機関として、文部省関係官、学識経験者及び興行会社代表者などによって、委員会を組織し、実施計画の立案と運営に当るものであった。

そして昭和二十一年九月および十月、帝国劇場（東宝株式会社）、東京劇場（松竹株式会社）で、舞楽、能楽、人形浄瑠璃、演劇（歌舞伎劇、創作劇、諷刺劇）、歌劇、舞踊（邦舞、洋舞）、音楽（邦楽、洋楽）といったものを公開しようとするものであった。上演団体は執行委員会の選定したものである。

実施計画の中で最大の要は「本芸術祭は努めて低廉な入場料により、優秀作品を汎く一般に公開することを本旨としますが、現下諸物価の昂騰により実施経費が著しく嵩みますので通常興行方法によっては到底目的を達成することが出来ません。そこで社会事業基金寄附免税興行として大蔵省に特別許可を懇請します。」とところにあった。

当時興行には十割の入場税が課せられていたが、収益を社会事業に寄附する場合に限って、入場税を免税にすることが認められていた。けれどもその場合、主催団体は、社会事業として認められた法人の団体でなければならず、これを芸術祭に適用してもらおうというものであった。

当時の主税局長（池田勇人）に、今日出海芸術課長は再三にわたり、純益金を日本赤十字社に寄附することで接衝したが、この要請はついに認められなかった。

この蹉跌によって、第一回芸術祭の実施は、著しく消極的なものにならざるを得なくなった。文部省が主唱することの意味が、事務的な世話をする以外、興行そのものにプラスするものを何らもたないものになってしまったからだ。結局興行会社に頼ってこの催を実施することではなくなった。

当時焼土の東京で、公演を行っていた劇場は、中央では東京劇場と帝国劇場、有楽座のみで、あとは新宿に、新宿第一劇場、浅草に、松竹座、常盤座、花月劇場などがあつたぐらいのものである。芸術祭は帝国劇場と東京劇場を開催劇場としたから、当然東宝株式会社と松竹株式会社に、全面的に協力を依頼することになった。

その頃歌舞伎座はまだ戦災から復旧せず、東京劇場が歌舞伎の常打小屋となっており、そこで松竹としては、東京劇場の九月、十月の歌舞伎公演を芸術祭興行と銘打って、芸術祭執行委員会の面目を果すことができた。

しかし東宝の場合は、帝国劇場を全面的に開放し、歌舞伎以外のあらゆる部門の芸能を一堂で公演するものだけに、想像に余りある協力と犠牲がはらわれた。

東京劇場の芸術祭歌舞伎は、九月を菊五郎、幸四郎、三津五郎一座、十月を吉右衛門、猿之助一座によって行なわれた。

帝国劇場の方は、十月は能楽、新協劇団他の新劇、東京歌劇団の歌劇、邦楽、日本舞踊、十月には宮内庁の雅楽、洋楽、文学座の創作劇、東京バレエ団の洋舞と、多種多様のジャンルの芸術が一堂で研を競い合った。

第二回～第四回芸術祭

△無予算の芸術祭▽

第一回から第四回までの芸術祭は、全く予算なしの芸術祭であった。免税興行が芸術祭に適用されれば、それだけでも文部省の主唱の意味があるが、それが法的にも不可能であった。

第一回の芸術祭はそれでも、芸能界も戦後の立直りのキッカケを求めている時でもあり、まがりなりにも東宝、松竹をはじめ、興行会社や劇団、芸能人が積極的に関心を示し協力した。

しかし、昭和二十二年以降になると、敗戦による国民生活の現実は一層きびしいものになり、その中で「芸術祭は……国民のとげとげしい暗い生活を克服して、貧しさのうちに潤いと喜びを見出さしめんとし、現下最高の舞台芸術及び音楽を採り上げ、けんらんたる芸術祭を開催することは……」（昭和二十二年芸術祭開催要項の趣旨から）といったうたい文句で行なわれようとした。芸術祭にとって、もっとも苦難の時期だったといえよう。

実施方針としては、第一回の時と同じように、文部省の中に、学識経験者及び興行会社代表若干名を以て組織する芸術祭執行委員会を置き、実施計画の樹立と運営に当ることとし、その事務を文部省社会教育局芸術課が行なうものとした。

芸術祭の期間を九月から十一月にわたる三か月間とし、その期間内に東京都内で行なう興行を、事前に執行委員会に申請してもらい、これを委員会が審議し適当と認めるものを芸術祭参加演目とする、芸術祭参加公演制が採られた。参加を希望するしないは、興行や公演を行う芸能人、団体の自由意志であるから、事務局である芸術課は、主な興行会社や劇団等に参加を勧奨しなればならなかった。このような中で、芸術祭無用論が、しばしば世論として、新聞や雑誌に書かれたのも致し方ないところであった。

かろうじてお祭りを色どり、芸術祭への参加意欲を起させるものとしては、芸術祭参加公演のうち、優秀なものに文部大臣賞（個人賞、団体賞）を授与することであった。もちろん芸術祭の予算は皆無であるから、芸能選奨費（年度のすぐれた芸術家を表彰する賞金、現在の芸術選奨）を代用していた。

参加制によって、芸術祭はその参加部門をはっきりさせる必要があり、舞楽、能楽、人形浄瑠璃、演劇（歌舞伎、新劇、翻訳劇）、歌劇、舞踊（邦舞、洋舞）、音楽（邦楽、洋楽）の七部門が定められた。

ただ、昭和二十三年からは、映画と放送の二部門が新しい部門として加えられた。

参加団体の数は、部門のひろがりとともに当然ふえ、昭和二十三年の参加公演の二十が、昭和二十三年には四十、昭和二十四年には六十となつて、参加意欲が年ごとに高まっていた。しかし、昭和二十三年の四十参加公演中、二十が能楽と邦楽でしめられ、これに対し洋楽の参加は全くなく、洋舞二、バレエ、新劇の公演はわずかに各一という状態に止まっている。古典芸術の参加が積極的なのに対し、現代芸術側の参加への関心のうすさを示している。もちろん昭和二十二年十二月から、入場税が十五割となり、劇場という場をもたない洋楽などは公演がままならなかったこともその理由として挙げられよう。

△芸術祭公聴会など▽

昭和二十四年、第四回芸術祭を迎えるに当って、芸術課は芸能関係者約三十名を文部省に招いて、芸術祭に対する各界の意見を聴く公聴会を開いた。この会が開かれた目的は、昭和二十四年度の芸術祭を開催するに当っての、各界の協力を要請する一助としたもので、特に現代芸術側の参加を勧奨するところに主眼があった。

これに対し現代芸術特に新劇側の意見は、文部省が予算なくしてただ太鼓をたたきだけの芸術祭ならば止めた方がいいという強硬意見であった。そして、芸術祭は国民の生活意欲を反映する現代芸術に重きをおくのか、亡びゆく古典芸術を保護するところにあるのかといった論議がなされた。

この公聴会は芸術課の意図に反し、芸術祭の存廃論にまで発展した。結局、来年度すなわち二十五年度には必ず予算を獲得して芸術祭が実行されるよう努力することを約し、そのためにも現代芸術側も極力参加し、この芸術祭を盛りあげ、予算獲得への援護をしてほしいという結論で幕を閉じた。

ともあれこの公聴会がよき反響となってあらわれ、昭和二十四年度には、現代芸術側の参加もぐんとふえ、前年度全く参加のなかった洋楽は、部門中最大の十五公演の参加があり、また舞踊部門として、日劇ダンシングチームの「世界の踊り」、ムーラン・ルージュの「太陽を射る者」が参加を認められ、ショー形式のものへの参加のめちがけられた。

これより先、昭和二十三年に主として講談、落語界の主だっためんめんが、徳川夢声を先達にして芸術課を訪れ、秋の芸術祭に対し、春の大衆芸能祭の開催を提案してきたこともあり、前記のショーの参加とともに、大衆芸能への途をおし広げた。

昭和二十二年十一月二十三日、総理官邸で当時の片山首相による国立劇場設置の懇談会が持たれたことは、芸術祭の将来に多少の望みを託するものであった。これは民間芸能関係者（藤原義江、土方与志、石井漢、河竹繁俊、皆

川湊、森岩雄、大田黒元雄、佐々木季丸、遠山静雄、山田肇）によって、国立劇場設置への意見書が出されたことに端を発するもので、片山首相は談話を発表して、その設置を約束した。が、翌二十三年二月内閣は瓦解したため淡い期待となって終った。しかし文部省の芸術課としては、昭和二十三年、四年と続けて国立劇場の予算案を大蔵省へ提出し、芸術祭がこれになお一縷の望みをつないでいたのである。

もちろん、国立劇場の建設がすぐ行われることは期待できなくても、準備調査費だけでも認められれば、芸術祭の将来に、大きな裏付けとなることは必至だからである。

第五回芸術祭

△芸術祭主催公演▽

昭和二十五年、芸術祭は初めて、約五百万円ほどの国家予算を計上された。これによって芸術祭は、多少とも他力本願から、一步自主性をおしすすめることができたわけである。

しかしまた、四百万円足らずの劇場借費用で、劇場を借り切つて、あらゆる芸術部門の公演を集中公演させることはできず、結局は芸術祭執行委員会と興行会社、或は芸能団体との共同による公演で、文部省がその公演費用の一部を負担するものを主催公演と銘打つて芸術祭とすることにした。

従来に参加公演は、映画、放送だけとし、その代りに、昭和二十二年以降参加を勧奨して来た芸能界の各部門の協力を生かすべく、各ジャンルにそれぞれ主催公演が設けられることになり、ここに十一部門の芸術祭執行委員会主催公演が計画されることになった。必然的に委員は部門別に分けられ、各部門ごとに計画が練られた。

昭和二十五年度の芸術祭主催公演は、三部にわけられる。第一部は従来に参加部門における主催公演。それに主催はしない（経費は分担しない）が、特殊部門として参加する映画、放送。第二部は郷土芸能、第三部は名人会である。

郷土芸能は、かつて戦前、日本青年館において何年か続けられてきたものの復活であり、地方と中央との芸能のきずなをここに求めようとしたものである。

名人会は、「有名芸能人の個人芸その他余り公開の機会をめぐられなかった高価な芸能作品の発表会」ではあるが、根底には前記の大衆芸能への足掛りが、ここに芽ばえたものとみていい。

△意欲に満ちた公演▽

主催公演中特筆すべき話題をあげれば、まず、歌舞伎において、東西両花道を設けたことである。これは芸術祭執行委員側の提案によるものだが、劇場側としては、既存の花道以外、もう一本花道を設けるとなると、その分多くの座席を取り払わなくてはならず、その設備費用と失った座席の観劇料の減収とを合せると、公演収支のバランスが取れないという理由から、にわかには賛成されなかったが、ようやく松竹側の決断によって、十一月の東京劇場では、久しく行なわれることのなかった両花道使用による「妹背山婦女庭訓」の吉野川の段とそれに「沼津」が公演された。

△芸術祭の普及▽

この頃地方都市でも中央の芸術祭にならつて、文化の日を中心に芸術祭あるいは文化祭が行なわれていた。こうした地方芸術祭に、国の芸術祭の費用が一部補助された。その額は、大阪市の二五万円を除いては、一〇万から八万程度のもにすぎなかったが、国庫補助というささい水によって、当該府県の主催者が、県あるいは市から予算を獲得しやすくなったことは確かである。

第六回 芸術祭

△主催と参加公演▽

第五回の芸術祭は、主催公演のみ（映画、放送の部門を除く）だったが、芸術祭はお祭りであるから多彩のひろがりをもった方がよいのではないか、という執行委員会の意見があり、それまでの参加公演制度を復活させ、第六回芸術祭からは、主催と参加の二本立てで行なわれることになった。

またアマチュアコンクールを開き、学生、勤労者たちも参加できる道を開いたこと、さらに芸術祭を東京開催のものと地方開催のものを区別し、東京開催のものを文部省芸術祭とし、地方のものと〇〇道府県芸術祭と呼称するよう定めたこと、さらに芸術祭執行委員会の会長を文部大臣と定め、委員長を委員の中から互選するようとりきめたことなどが、制度上の主な改革点としてあげられよう。

この年度の芸術祭主催公演は、演劇に自主的企画を強く打ち出すことが計られた。演劇部門の執行委員である浜村米蔵氏がプロデューサー格となり、新橋演舞場において、新派と新劇の合同による、新作二本の上演を行なった。その一つは泉鏡花作「天守物語」（新作ではないが初演もの）であり、いま一つは内村直也氏に執筆依頼して書きおろされた創作劇「裸舞台」である。

新派と新劇の役者が組み合わさって一つの芝居を行なうことも、当時は破格のことだったが、「天守物語」は、演出が千田是也、舞台装置が伊藤嘉朗、舞踊振付が伊藤道郎といった伊藤三兄弟によるトリオもまた話題を提供したものである。

△参加と授賞▽

芸術祭も六回を迎えるとなると、種々運営制度上の取りきめが必要となってくる。特に参加公演に対しては、これまで著しい政治的偏向や風俗壊乱の恐れがない限り、参加が認められたが、参加にも主催公演同等の芸術的権威が必要ではないかという主張から、執行委員会の内規のような形で、参加規程が設けられた。そこで、「芸術祭参加を認められる公演はその内容が主催公演に匹敵する程度の優秀なものであり、健康にして文化的なものであること。ただしそのものを奨励することが芸術振興の見地から現段階において大切だと思われるものに対してはその優秀性の程度に応じて参加を認められることがある」という一項を定めた。

しかし現実にかうした抽象的な言葉だけで、作品の芸術的価値評価は定められるものではなく、また芸術祭はお祭りだから、参加作品を厳選するよりも、なるべく参加させて、参加への意欲や関心を高める方が本来だとする意見が執行委員側の一部にあり、実際には主催団体がはっきりしていれば、ほぼ参加は問題なく認められた。

芸術祭の授賞についても、これまでは芸能選奨の賞金を芸術祭の賞として代行させていたものが、二十五年度からは芸術祭それ自身賞金予算をもつようになったので、両者を区別し、芸術祭賞、芸術祭奨励賞の二種を定めた。

この年度の授賞で、徳川夢声新講談「宮本武蔵・風車」が芸術祭賞を授賞され、これをきっかけに翌年大衆芸能部門が独立した参加部門となった。

この年度の参加公演は三〇公演で、参加公演のみだった昭和二十四年度（二十五年度は主催公演のみ）の六〇公演

にくらべ、参加本数が少くなっているのは、ひとつには参加規程が設けられ、多少厳選されたということもあるが、また邦楽、邦舞、能楽などの古典芸能分野では、従来温習的なものがかかなり参加していたので、これらの参加を自粛してもらったからでもある。

参加で問題となったのは「東おどり」で、芸者は芸術家かという論議が執行委員会で交わされ、結局芸者の源氏名ではなく、舞踊の名取名で参加することに決められた。

この年のみ、全日本学生音楽コンクールが芸術祭の主催公演として、毎日新聞社との共催のもとに開かれ、第一位に芸術祭奨励賞が贈られている。芸術祭を芸能専門人のものに限るか、アマチュアまで含め、芸術祭を国民すべての参加のものにするか、そのあたりはまだこの年度では手ざぐり状態であり、可能性のあるものをもかくやってみるところから芸術祭の在り方を見定めようとしていた、といえようか。

第七回芸術祭

△創作の高揚▽

昭和二十六年九月、日本は四十八か国との間に平和条約を締結し、自主独立国家としての第一歩をふみだした。迎える昭和二十七年度の第七回芸術祭は、自主独立の記念すべき祭典として、新文化の創造にその主眼をおき、芸術高揚を目ざしての主催公演を企画した。

演劇においては、歌舞伎と新劇にそれぞれ創作劇を上演することとした。今日では歌舞伎の新作上演はめずらしいこととしないが、当時はまだ少なく、たまたま前年、作家の大仏次郎氏が、新派に「楊貴妃」を書き、これが水谷八重子によって上演され好評だったところから、その大仏氏に委嘱して「若き日の信長」が書きおろされ、菊五郎劇団によって上演された。

一方現代劇の方は、文学座、俳優座、民芸を対象とし、それぞれ創作劇を書きおろしてもらい、文学座は福田恒存氏の「竜を撫でた男」を、俳優座は加藤道夫氏の「襤褸と宝石」を、民芸は八住利雄氏の「十三階段」を、いずれも三越劇場で十、十一月の間に上演した。

洋楽においても、邦人の創作作品を採り上げ、塚原哲夫氏の交響組曲「異国の踊子」、松平頼則氏の「ピアノと管

弦楽の爲の主題と変奏」の二作品をNHK交響楽団により上演、無料公開した。

オペラは創作までにはいたらず、その代り堀内敬三訳による「フィガロの結婚」を芸大出身者、藤原歌劇団、長門歌劇団、二期会、関西オペラグループ等、オペラ界の大合同の形で、東京都民劇場と共催で実施した。

この年は皇太子の立太子の時に当り、その奉祝の意味をこめ、古式に則った弓矢立合の行事を採り入れての五流能が行われた。

主催公演が創作中心であったように、参加部門はあっても創作作品が多く、新生新派の八木隆一郎作「姉の言葉」をはじめ、新国劇、前進座等いずれも創作をもって参加した。

この年演劇部門に女剣劇の大江美智子一座が参加した。もっとも大江美智子は現代劇の女の役として出演したのだが、浅草演劇が芸術祭に参加したのはこれがはじめてである。

△芸術祭執行委員会▽

昭和二十七年度は芸術祭執行委員会を二部にわけ、第一部を主催公演企画委員とし、第二部を参加公演審査委員とした。これによって主催公演の企画を練るグループと、参加公演を見てまわり、審査するグループと、それぞれ担当を分担しあうようにしたが、実際には同一人がダブル場合も多かった。

さきに述べたように、執行委員会の会長は、その時の文部大臣がなり、大臣たる会長が委嘱する執行委員によって年度の芸術祭がとり行なわれ、執行委員の中から議長として委員長が選出されたが、委員長はずっと日本芸術院長の高橋誠一郎氏が選出されてきた。

芸術祭執行委員会がもっとも議論百出するのは授賞選考の総会である。特にこの年から、大衆芸能部門が設けられたこと、またそれまでNHKだけであった放送に、民間放送会社が参加するようになり、放送部門の比重が大きくな

ったことなどにより、授賞の範囲も数も増すようになったため、一段と授賞者をきめる総会にはぎやかさを増すこととなった。

賞金の総額は予算で定められた範囲内なので、部門や授賞の数が多くなれば、当然賞金額は減る。もっとも賞金額はたいしたことはないのだから、この際奨励振興の意味で、授賞者を多くした方がいいという意見や、いや授賞は厳選してその権威を高めるべきだという意見がこの年の総会で論議され、結局前者の奨励振興の意味あいが強い方へ、芸術祭の授賞態勢がかたまっていた。

△芸術祭放送部門▽

昭和二十五年新しく放送法が公布され、日本に商業放送が誕生するや、商業放送会社は統々と全国的につくられた結果、この年度からは商業放送も含めたラジオ・ドラマによる芸術祭参加が決められた。他に放送音楽だけは音楽部門に参加する途を開いた。

ラジオ・ドラマはNHKは中央放送局および支局のものをまとめ、民間放送会社のものは、民間放送連盟がまとめて、芸術祭執行委員会に参加申請することとした。参加本数をNHK六本、民間放送は各社三本以内ということできとめられた。

放送部門の参加ということは、予期せざる大きな効果を生んだ。それまで芸術祭作品が全国的に広範囲な観客を対象とするものは、わずかに映画の芸術祭参加作品を通してのみであったものが、ラジオの参加によって、電波の及ぶところ芸術祭がうたわれることになり、また参加作品がきかれれば、当然受賞にも関心が持たれるわけで、その意味で、昭和二十七年には他の部門に比し、一番多くの授賞がこの放送部門になされた。

放送部門の審査は他の部門のように公演場所をその公演時にみてまわるのではなく、すべてをテープ録音し、審査

員が一堂に会し、全放送作品を同一条件のもとにきく方法がとられた。

芸術祭が当時のマスコミの先端であるラジオ放送とつながったことで、放送部門はもちろんのこと、芸術祭への世間の関心は著しく高まった。また当時はまだ放送によって認められ賞が与えられるというようなことの少なかった時代だったから、放送タレントは授賞によって、他の芸術部門の人たちと同等の評価を与えられることになり、他の部門より新人が多いこの部門での芸術祭は、新人登竜の門ともなった。

またこれによって、芸術祭はその表彰に大きな力点がおかれるようになり、芸能一大コンクールのような様相を呈するようになったことも事実である。

第八回 芸術祭

△脚本及び楽曲の公募▽

二十七年頃から引きつづき、芸術祭は創作精神の高揚を主催公演の眼目としていた。そして、歴史劇で大劇場上演にふさわしい作品を広く一般から募集し、その最優秀作を歌舞伎座で上演する企画を立てた。

第一回の当選作品は高橋文雄作「明治零年」であった。当選作は決定しても、いざこれを上演するとなると、劇団から配役から、上演の決定をみるまでには多くの問題が処理されて行かなければならないが、ともかく第一回の当選作は、松竹株式会社配慮で、予定通り歌舞伎座で日の目をみる事ができた。

脚本の募集とともに楽曲の募集も行なわれた。これは譜面審査で二篇を入選させ、入選作二作を公開演奏し、同時審査の上授賞作品を決定する方法をとった。この方はラジオ東京の協力によって、東京交響楽団の演奏により公開され、牧野由多可作曲の「ピアノ協奏曲」が第一回の入賞作となった。

△国民劇場と芸術祭▽

この当時、新劇はひどい劇場難に苦しんでいた。特にこれまで唯一の新劇々場であった三越劇場が、昭和二十七年

度の芸術祭新劇公演を最後にして、夜間の興行を行わなくなったため、新劇は公演の場を失ってしまった。

こうしたとき、たまたまC・I・Eが使用していた神田の一橋大学の講堂が返還されることとなり、その講堂を文部省芸術課が、年百日間演劇活動に利用することが、一橋大学との間で了解された。この一ツ橋講堂を利用しての演劇活動を「国民劇場」と名付け、新劇公演の場として活用することになった。

そこでこの年度の芸術祭は、この場を使って、芸術祭執行委員会と国民劇場運営委員会による、自主的演劇公演が企画され、ひとつのプロデューサーシステムによる演劇公演が試みられようとした。

ここでも創作劇を採りあげることにし、久保田万太郎の「鴈」と、正宗白鳥の「江島生島」の二本の創作劇を上演することに決定した。

この他、恒例のように、雅楽、郷土芸能、能楽等さまざまな主催公演が持たれたが、能楽には皇后陛下の行啓があって、光彩をそえた。

昭和二十八年度は、さらに芸術祭の規約の整備が必要となり、放送部門はその内容を、放送劇、放送物語、放送音楽物語、放送音楽劇とし、大衆芸能部門は、浪曲、落語、講談、シヨ、大衆演劇、軽音楽、演芸とさだめられた。

またこの年度から新しくレコードの部門が設けられ、レコードのラベルに芸術祭参加がうたわれるようになった。大衆芸能部門が参加公演部門としてはっきりうたわれるようになったのは、レコード部門とともにこの年からである。

そして大衆芸能部門の参加公演からはじめて、授賞者として講談の田辺南龍が芸術祭賞をおくられ、大衆芸能界に参加への大きな刺激を与えるものとなった。ただしレコード部門はまだ準備期間が少ないこともあって、授賞作品はなかった。

映画部門はこれまで各社一本の参加だったが、この年度から各社二本以内が参加できることとなった。

第九回 芸術祭

△主催公演の転換▽

これまで芸術祭の主催公演は、そのまま自主性を強調してきたが、少ない予算では理想的な実施は困難であり、その無理をおしすすめることは公演の成果にも影響することでもあるし、また戦後九年を経て、芸術界も新しい試みが自主的に行なわれるようになり、芸術祭が企画した試みもかなり各界の自由な活動のうちに吸収されていっているなどの諸点から、芸術祭の主催公演は、芸能界の自主的活動を助け、有意義な公演を助成する方向でとらえられるように転換が計られた。これは芸術祭が発当初、はっきりした性格を持っていなかったがために、そこに主体性を確立しようとして、一途に自主公演をもとうとしたことに対する、一つの反省であったともいえる。

ここにこの年の芸術祭は、郷土芸能のような公演を除いて、芸能界の秋の公演の中から、その公演を助成すること有意義とみなされるものに対し、芸術祭執行委員会が共催し、その費用の一部を負担するという方向を採った。

そこで演劇においては、昨年に引きつづいての歴史劇の入賞脚本の上演に加えて、チエーホフ五十年祭を記念して、文学座、俳優座、民芸三劇団のベテラン俳優による「かもめ」の合同公演を主催公演とした。

歴史劇の脚本募集は応募八十七篇中、内藤幸政作「日本献上記」が入選し、歌舞伎座で菊五郎劇団により上演され

たほか、創作劇として飯沢匠作「二号」が文学座により、一ツ橋講堂で上演された。

△映画と放送の新風▽

芸術祭における映画部門は、これまで参加方式一本であったが、この年は従前からの参加方式のほかに、新しく主催公演を企画開催し、これを一般に入場無料で開放した。

その一つは「芸術祭賞・文部大臣賞受賞映画鑑賞会」であり、いま一つは「映画の歴史を見る会」である。前者は過去において芸術祭賞を獲得した映画と、各年度において文部大臣賞を授賞された教育短編映画の上映をはかったもので、通常興行場では上映されがたいものだけに有意義な催物だった。

後者は映画が発明されて以来の歩みを、明治から大正中期まで、各年代の代表作を選抜上映し、映画の文化的価値をひろく一般にしらせ、あわせて映画保存の重要性をうったえようとする目的をもつものであった。上映にあたっては、特にサイレント映画時代の一流説明者弁士が総出演し、NHK管弦楽団の伴奏という豪華なもので、会場は満員盛況であった。

一方放送部門は年毎にラジオ・ドラマの参加希望が多くなり、参加本数を制限せざるを得なくなり（審査能力の限界から）、NHKは八作品以内、民間放送は出力により本数制限を行ない、作品の長さを一時間以内と規制した。なおこの年から放送部門に新しくテレビジョンが加えられたことが注目される。

まだこの時期は東京ではNHK、NTV、KRの三局の開局のみで、一応試験的な参加であった。結局NHKとNTVの二局が各一本参加するに止まったが、将来の芸術祭参加部門の大きな比重を占めるかわりあいだが、ここからはじまった。

放送の授賞は二十八年度あたりから、演技者、演出者ばかりでなく、効果のような目立たない役割にも賞がおくら

れて、技術面の向上をうながしたが、この年度はさらに効果や調整といった面にも及んで、放送技術者の能力が俳優や演出家と並んで評価されるようになった。

△文楽素浄瑠璃公演▽

主催公演が助成的見地に立つようになったとはいえ、芸術祭なるが故にといわれるよう公演を持つ意図が失われたわけではない。

当時、古典芸能である文楽は、過去七年間因会と三和会の両派にわかれ、互に感情的もつれもあって交流がとだえていた。そこでこの両者を芸術祭を契機として合同公演をすることができれば、両派のためにも文楽愛好者のためにも、さらに何よりも文楽というすぐれた伝統芸術を長く保存するためにも必要なことだと考え、まず漸進的に人形を除いた浄瑠璃と三味線のみで文楽素浄瑠璃公演において、合同公演を企画した。

幸いにして文楽の両派に親しい安藤鶴夫・吉田幸三郎氏などの助言と協力を得て、東横ホールで開催をみた。この公演は大暴風雨にたたられたこともあって、予想以上の大赤字を残したが、ともあれこの公演が契機となり、翌年からは人形を加えての合同公演がもたれるようになり、やがては両派が合体するのである。

第十回 芸術祭

△十周年記念と反省▽

芸術祭は昭和三十年、十回目の芸術祭を迎え、ほぼ芸能全部門にわたる祭典として定着した。

主催公演においては、演劇では、歴史劇の募集脚本の入選作・葦山圭介作「辺城の人」が歌舞伎座で吉右衛門劇団によって上演されたほか、文楽が前年の素浄瑠璃を一步おしすめ、人形、太夫、三味線の三業一体による合同公演をもち、新劇は文学座、俳優座、劇団民芸の中堅クラス合同公演により、リリアン・ヘルマン作の「秋の園」が上演された。交響楽公演はこの年は三曲の入選作品があり、これを公開演奏し、端山貢明作曲の「ピアノ協奏曲」が入賞作となった。

舞踊と歌劇は一年交替で採りあげてきたのをあらためて、両界の情勢を判断した上で、上演種目を中心に良いものを助成するという方針にきりかえ、その結果小牧バレエ団が行なう、横光利一原作の「日輪」の舞踊化が採りあげられ、公演されたのがおもとところである。

この年は、芸術祭十周年を記念して、映画「芸術祭」(二巻)が、文部省企画、読売映画社制作で作られた。

またこの年から、例年文部大臣室で行なってきた芸術祭授賞式を、ひろく一般に公開し、日比谷公会堂で行ない、

受賞映画「夫婦善哉」が上映された。

なおまた「第十回芸術祭記念歌舞伎招待公演」がもたれた。これは平素あまり観劇の機会にめぐまれない、都内の戦没遺族、病院の看護婦、養老院入院者等約二、五〇〇名を歌舞伎座に無料招待したものである。

またこの年の芸術祭期間中、NHKは「芸術祭は国民大衆のものか?」という放送討論会を開いた。

芸術祭は十年の間に、多くの主催公演をもった。創作に、あるいは本邦初演のものに力をかしてきた。郷土芸能や文楽合同公演のように、芸術祭のみがなしかつたいくつかの特色ある公演もあった。

△芸術祭巡回公演▽

芸術祭が中央の行事のみに終始して、地方に対する施策が何ら顧みられていないという声は、しばしば芸術祭批判の中に聞かれるところであった。

昭和二十五年はじめて芸術祭が予算化されたとき、大阪、名古屋をはじめ五市で行われた地方芸術祭に、僅かながら経費を配分したことがあるが、これはこの年のみで終っている。

その後芸術祭の予算がそれほど増えることがなく、中央の行事さえも不十分な予算をもってしては、とても地方まで補助しきれないということと、その手続上の問題が最大の理由であった。

しかし、何とかして地方に中央から、よい演劇、よい音楽を送り、鑑賞する機会を提供したいという考えから、この年度はじめて劇団民芸によるシングの「西の国の人気者」を巡回公演させることに成功した。これは東京公演は試演発表会を一つ橋講堂で一回行なっただけで、北陸、中国、九州の地方都市を巡回した。そして、この公演により宇野重吉が芸術祭賞を授賞された。その演技力もさることながら、巡回という目的にかなう劇団統率力もふくめ、主導的演技という表現が授賞理由に与えられている。

第十一回芸術祭

△公募作品の上演▽

第九回の芸術祭から毎年行なわれてきた演劇脚本、音楽々曲の公募および入選作の上演は、紆余曲折をたどりつつも、毎年実施をはかってきたが、上演にたえる作品が毎回必ず求められるとはいいい切れない。また求め得られてもこれを上演するとなると興行者や劇団が逡巡するのが現状であった。

第十一回芸術祭からは、演劇脚本の公募の内容をこれまでの歴史劇から拡張、現代劇も含めることにした。それは史劇というわくの中で上演にたえる作品を求めるよりも、わくを拡張することによって、少しでも質の高い作品を求め、上演により可能性のはばをひろげようとする意図のもとに行なわれたものである。この年入賞したのが本田英郎作の「帰らぬ人」で劇団民芸によって上演された。しかしこの上演も決してスムーズに事が進んだわけではなかった。芸術祭の脚本募集も一つの曲り角に来ていた。

同じ曲り角は楽曲募集の方にもあった。すでに第九回は入選作品がなく、第十回も締切期日を二か月延ばして、ようやく十二月十五日の芸術祭期間の最後に、入選候補作品の発表会が行なわれるという結果だった。そこで第十一回目からは、NHKと共催でこれを公募、NHK交響楽団によって発表演奏会が開かれることにしたが、楽曲は交響曲

と合唱曲の二本立てで募集され、そして次の年からは、交響曲の募集は中止され、合唱曲のみとなった。すなわち作品の質の上からも、演奏の見通しの上からも、脚本の場合と同様、交響曲の公募は、ひとつの限界を迎えていた。

ただ第十一回の脚本募集入選作の「帰らぬ人」は、中央公論社の好意もあって、雑誌「中央公論」の十二月号に掲載することができた。

△地方巡回公演の積極化▽

前年、地方巡回公演を行なった「西の国の人気者」の評判が良かったのに応えて、主催公演のものを、できるだけ地方巡回させ、芸術祭の普及化を少しでもはかろうとし、この年度は劇団民芸の「帰らぬ人」と、青年座の椎名麟三作「タンタロスの踊り」を前者は地方十五か所、後者は二十か所で巡回公演した。

当時はまだ劇場難で、しかも地方演劇熱は、テレビの普及とともに高まりつつあり、新劇団は続出し、新劇ブームの感を呈していた折なので、劇団の地方公演が盛んに行われた。

この年は演劇のみでなく音楽においても、渡辺暁雄の指揮する日本フィルハーモニーによる交響楽が、浜松、大阪などの諸都市を巡り、成果を挙げることができた。

△放送音楽の活躍▽

この年の参加部門では、ラジオ、テレビの進出が目立った。特にラジオは音の駆使に注目すべき作品が少なくなく、授賞作品をみても、音楽童話「マンボと少年と蛙たち」(朝日放送)、音楽物語「瓶の中の世界」の作曲(NHK)、「ラジオのための三つのエチュード」の音響処理(新日本放送)等多彩なものがある。

テレビの急速な発展にともない、ラジオはテレビの視聴同時の優位性に対し、音の機能を完全に生かすという、ラ

ジョ自体の使命に道を開こうとした努力が、録音技術や音響調整への新しい工夫、言葉と音および音楽との調和を求めた高踏的な新しい様式への開発など、新分野への意気込みがうかがわれるものが多くみられた。

△外国映画コンクール▽

この年の芸術祭予算に、約二百万円ほどの外国映画コンクールの経費が付加された。これはカンヌやベニスにおける国際映画コンクールのようなものを芸術祭の一環として行なうとする当初の想定で企画されたもので、参加各社から出品料を取り、その見返りとして、賞金およびコンクールの会場費を国が支出するというものだった。

しかし邦画の映画各社は、この出品料をとまなう国際映画コンクールには賛同せず、やむなく洋画の参加を勧誘し、各社三万円の出品料によって、邦画を除く国際映画コンクールを、名称を「芸術祭外国映画コンクール」として実施することができ、「居酒屋」と「赤い風船」に授賞された。

このコンクールは、この年のみで終り、賞金のみが予算として帰り、十二回からは芸術祭映画部門の中の外国映画部門として扱われるようになった。

第十二回・第十三回芸術祭

△企画の転換期▽

芸術祭はその回を重ねること十回をこえ、すでに毎年の秋をいどころ芸能の祭典として欠かせない年中行事となったが、第十二回、第十三回あたりで、そろそろ従来の主催公演に対し、その使命の終わったもの、またこれ以上発展性を期待できないものを整理し、新しい波へ乗りかえる転換期を迎えるに到った。主催公演の数をみても、第十一回の芸術祭では十五公演あったものが、第十二回では十一公演に、第十三回では十公演に減少されている。

第九回の芸術祭で素浄瑠璃ながら、二派にわかれた因会、三和会を同一舞台に迎えることができた文楽公演は、第十回には人形を加えて、両派同一舞台に出演するようになり、第十一回には一つの出し物に両派の人たちがともども出演する合同公演にまで進捗した。さらに第十二回では、芸術祭執行委員会の企画通りに、両派のメンバーをまじえての完全な合同公演が実現し、「碁太平記白石嘯」、「ひらかな盛衰記」などのめずらしい通し狂言の実現もみた。そこで十二回を契機に、芸術祭の文楽公演はその使命を一応終ったものとして、主催公演を打ち切った。

能楽公演は主催公演の中で欠くことのできない企画として、第一回より毎年趣向をこらし、十三回までその公演がつづけられてきたが、能楽の宿命ともいべき時代的な差異が、興行システムや内容の工夫にもかかわらず、一般大

衆を吸収することが困難であった。それでも第十三回芸術祭は、日比谷公会堂で入場無料とし大衆化を計り、第十四回は整理券として百円の入場料で開催したが、出演者の多大な犠牲を強要する結果が多すぎ、第十四回をもって、伝統の芸術祭能楽公演は一応中止の形となった。

楽曲、脚本の公募については、楽曲は交響曲から合唱曲へかわったものの、これも第十四回をもって、その募集は一応打ち切られた。

第十一回にはじめられた外国映画コンクールは、十二回から従来の邦画参加と同じように扱われ、五作品の参加を、また十三回は、芸術祭期間中、都内で一般封切りされる外国映画について、外国映画輸入配給会社から資料を提供してもらい、その中から、外国映画芸術祭作品を執行委員会側で選定し、そのうち最優秀なものに賞を贈る方法をとった。

また、映画部門の邦画参加作品は、第十二回から劇映画以外に、非劇映画の参加も認めるようになった。これは一般映画館に封切されることのない動画、記録映画の類で、年間製作された作品の中から、教育映画製作者連盟の推薦にもとづいたものを参加作品とし、これを芸術祭の主催公演の中で、「芸術祭非劇映画鑑賞会」と銘打って公開し、一般の非劇映画に対する鑑賞の機会を提供し、あわせ、授賞によって、優秀作品製作への意欲を高める方途としたものである。

この時期からうかがわれることは、芸術祭が古典的なものから現代的、大衆的なものへと、主催公演が整理、改変されていく状況を知ることができる。

△参加公演の変化▽

第十二回、十三回では主催公演よりも参加公演に、特色あるものを見出すことができる。ラジオにあつては、この

年度ごろから邦楽、洋楽の交流が著しくなり、それがより具体的に表れたことである。第十二回の芸術祭音楽部門には、日本の楽器を使ったり、民謡を素材にした作品が多くあらわれ、それらの中からの授賞作品が少なくなかった。第十二回の芸術祭賞を受けた、邦楽「切支丹道成寺」（ニッポン放送）や奨励賞では間宮芳生の「八面の箏と室内管弦楽のための協奏曲」（文化放送）、鈴木嘉代子の「洋楽人の作曲による第五回現代筆曲の夕」が、第十三回では、「日本の箏と管弦楽のための協奏曲」（文化放送）、また前年に引きつづいての間宮芳生の「混声合唱のためのコンポジション」が、成果を挙げ授賞されている。放送音楽がこうして、一般聴取者との結びつきの中から、邦楽、洋楽の区別を超えた新しい音楽を生み出していったことは、芸術祭の成果のひとつといっている。

△テレビの活躍▽

テレビは第十回から芸術祭に参加した。第十回が参加本数四本、第十一回が九本、第十二回が十七本、第十三回が二十二本と年ごとに上昇し、これに反しラジオは、第十回の四十本を頂点として、三十六本、二十九本、二十六本と逆に減少している。ひところのラジオの芸術祭参加本数の伸張と同じ上昇カーブで、テレビの参加が増えていることは、テレビ時代の到来を物語る。

むしろラジオは一応質的なものへと移行し、局側でおのずから厳選するようになり、それだけに全体水準が高く、ずばぬけてすぐれた作品を発見しにくくなり、芸術祭の賞はむしろテレビの方へ食われていくような傾向を示した。

第十回の芸術祭参加テレビでは、NHK放送の内村直也作「追跡」が芸術祭賞となった。セミ・ドキュメンタリー・ドラマで、月島岸壁、大坂道頓堀の四元を結んでのスリラー劇は、まだビデオ取りのなかった時にあって、すべて生放送され、テレビの同時性による迫真力をいかに発揮した。

第十一回の芸術祭テレビは、格段の技術的進歩をみせNHKの「どたんば」が芸術祭賞に、日本テレビとラジオ東

京のそれぞれ一作品が奨励賞となった。

第十二回からはフィルム使用がめだち、本格的なテレビ・ドラマ時代が出現し、視聴者の急速な増加とともに、テレビ・ドラマが社会的な反響をもつものとして大きく浮かび上った。特に芸術祭受賞作品となったラジオ東京の「私は貝になりたい」は、戦争の悲惨さというものを直かに茶の間に持ち込んで、大きな反響をよんだ。この放送は二百三十坪の大スタジオだけでは足りず、百八十一カットをビデオテープに録画し、後半三百三十一カットをナマで放送したというスケールの大きさを、当時のテレビドラマとしては記録的なものであった。

この作品は映画化されたが、テレビ作品が映画化される傾向は、この作品あたりから積極的になった。映画がようやく斜陽産業となり、テレビ時代が到来したのもこのあたりからきわだってきた。

この作品の世評が高かったことから、芸術祭の参加作品の中で、テレビ部門は、大きくクローズアップされるようになり、各放送局は芸術祭参加作品をめざしてその精力を集中するようになった。

芸術祭が、初期のテレビドラマの進歩向上に果たした役割はみのがすことのできないことである。

第十四回 芸術祭

第十四回芸術祭の主催公演の演劇は、東宝現代劇の菊田一夫作「がめつい奴」と松竹の歌舞伎劇、菊五郎劇団による大仏次郎作「殺生閻白」、それに新劇から俳優座公演の田中千禾夫作「千鳥」の三本が、いずれも新作で競演されることになった。

東宝の「がめつい奴」は空前の反響をよび、芸術祭主催公演の中でも、これほど大衆にアッピールした公演はほとんどなく、芸術祭期間後も続演に続演が重ねられ、日本演劇史上最高といわれるほどのロングランを記録した。この公演でお鹿婆さんを演じた三益愛子と「千鳥」の演出の千田是也に芸術祭賞が授賞された。また、千鳥の役を演じた市原悦子が奨励賞を受賞している。

この他にひさびさに小牧正英、東勇作、島田広、谷桃子、大灣愛子、貝谷八百子、松山樹子など、各バレエ団の主宰者が一堂に会して洋舞合同公演が開かれた。

こうしたバレエ界の合同に対し、モダン・ダンス系の全日本芸術舞踊協会の人たちも、新作を並べて合同公演を行ない、活潑な意気込みをみせた。

△芸術祭レコード部門▽

芸術祭にレコード部門の参加が認められたのは、第八回の芸術祭からであるが、当初のレコード部門設置の意図は、創作ものを奨励しようとするものであった。それもおびただしい流行歌レコードの氾濫の中にあつて、オーソドックスな音楽レコードを向上普及させようとするもので、各社三作品以内の参加によって競演された。

しかしレコードの芸術祭参加作品は、放送音楽の隆盛にくらべ生彩がなかった。この壁を打開すべく、第十四回の芸術祭は次のような参加規定を作った。

レコードについては、日本各社から発売されるもので、国内演奏吹込および国外演奏吹込とする。

(イ) 国内演奏吹込のものは、邦楽、洋楽、歌曲、音楽物語とする。各社の参加作品数は各社四組以内とする。

(ロ) 国外演奏吹込のものは、洋楽（軽音楽を除く）とする。各社の参加作品数は、各社二組以内とする。すなわち、かつてのレコード音楽の主流となっていたクラシック洋楽レコードの参加を設けたわけである。

しかし、レコード会社にとっては商業的にあまり大きな比重を占めていない洋楽レコードのことだから、参加してよし、しなくても構わないという中間的態度であつたため、この外国版の参加はこの年だけで終つてしまった。

とはいえ、この洋楽レコードの参加によつて、洋楽ファンを喜ばすワグナーの楽劇「ワルキューレ」や「ラインの黄金」などといった名曲が発売されたという功もあった。

なおこの年の授賞に、フランキー・堺の歌つたポピュラーソング「もぐらの唄」が芸術祭奨励賞になったが、この歌はその年の終りのNHK紅白歌合戦にも、フランキーによつて歌われた。こうして健康な大衆的な歌が、芸術祭のレコード部門に積極的に参加してきたことは、その後のレコード部門を大衆的な面にまで広げる足掛りとなった。

第十五回芸術祭

△芸術祭の大衆化▽

芸術祭の意義を少しでも広く一般に周知してもらう意味で、第十四回芸術祭の終了後、NETテレビから、その年の授賞作品の一部である花柳徳兵衛舞踊団による「唐来獅子」の公演と、芸術祭を語る座談会が放送された。

また十五回芸術祭のあとでも、やはりNETから「芸術祭大衆芸能部門を顧みて」という座談会が、安藤鶴夫氏を司会者とし、リーガル千太・万吉、桂文楽らを招いて放送された。

この年度は文化勲章に作家・吉川英治が、また俳優・榎本健一が紫綬褒章を授章されるなどあり、芸術祭もまた大衆芸能分野の活路が目立った時であつた。

芸術祭大衆芸能の参加部門にはじめて漫才が参加し、またレコード部門は軽音楽、流行歌といったものも参加できるよう、そのわくが広げられた。

レコード部門はそのわくが流行歌、軽音楽にまでひろげられ、参加本数がぐんとふえたが、授賞されたのは歌曲、民謡、合唱曲、邦楽であつて、流行歌や軽音楽からはまだそれに値する作品は得られなかった。

芸術祭主催公演も大衆との接触面を強く広くしようとする意図の公演が多かつた。演劇は菊五郎劇団による「シラ

ノ・ド・ベルジュラック」が歌舞伎座で上演され、東宝は井上靖作、菊田一夫脚色の「敦煌」が東京宝塚劇場で主催公演として上演された。また新劇は文学座による飯沢匡作「塔」が主催公演となり、歌舞伎の赤毛ものといい、東宝のグランドロマンスと銘打った現代劇といい、文学座の諷刺喜劇といい、それらが大衆路線の色調を強めていることが認められる。

この他に主催公演中の意欲的なものとして、花柳徳兵衛舞踊団の民俗舞踊公演と、日本映画戦後代表作六十選の上映が挙げられよう。

前者は「雪ん座のひびき」、「八岐大蛇」、「土くれ歳時記」の三つで、いずれも民俗芸能に取材したものである。これも一般大衆に理解されやすく楽しくみられる舞踊として打ち出され、産経ホールで五回公演という、邦舞公演としては異例の長期公演が試みられ、成功をおさめた。この公演の成果を反映してか、その後、舞踊界に民俗舞踊ブームをまきおこした。

後者の映画は、すでに実施されて来た、「映画の歴史を見る会」、「芸術祭参加記録映画鑑賞会」に加えて行われたもので、「日本映画戦後代表作六十選」と銘打ち、池袋人生座を会場として、一か月間にわたり、毎日替り二本立番組で上映されたものである。

この年の主催公演には、大衆芸能部門の主催公演として、「芸術祭バリエテ」が開かれた。これは第五回、第六回に行なわれた、三越劇場の「芸能鑑賞会」の復活ともいうべきもので、安藤鶴夫、野口久光、吉田幸三郎氏を中心に企画され、狂言、漫才、筆曲、上方舞、ショー、軽音楽、落語、辻講釈と日本の伝統演芸、現代演芸の数々を登場させた異色ある公演として、東横ホールで、娯楽性豊かな舞台をくりひろげた。

△関西勢力の進出▽

この年の芸術祭に関西側の進出が著しいことも目立った特色といえる。参加数ばかりでなく、受賞においても、関西芸能人の勢力がとみに上昇しつつあることを示した。

芸術祭賞十二のうち、四つまでが関西側の占めるところとなり、しかも十二のうち、映画、レコードのように会社が東京にのみあるものを除けば、実に七授賞のうち四授賞と、半数以上を関西側が占めたということになる。

この年の授賞には大衆芸能にはじめて参加した漫才から、リガール千太・万吉が、枯淡な「やきとり」で授賞されたのは、漫才参加への贈りものともいえよう。また、草月アートセンターの「ブルースの継承」は、黒人サイラス・モズレーの歌唱と解説が中心となりショー的要素を盛り上げた構成・演出およびその成果に授賞されたことも、注目されよう。

この年の音楽参加作品を眺めると、完全に洋楽といったものが少なくなり、邦人作曲、ローカルカラー的な作品が目立ち、ますます邦楽、洋楽の境界がとり除かれていく傾向を示している。また、バレエ、現代舞踊の参加がふえ、第十四回には邦舞十七、洋舞五に対し、十五回では邦舞十六に対し、洋舞十に、洋舞の参加数が倍加している。しかも洋舞の参加の多くは、若手青年グループで、バレエ、あるいはモダン・ダンスのいずれも、ようやく若手が戦前派にとってかわろうとする、新旧交替の時代を反映するものとして受けとめられるのである。

△テレビドラマの白熱化▽

芸術祭の部門で著しく脚光をあび、意欲の高まりを示したのはテレビドラマである。特に第十三回の「私は貝になりたい」、十四回の「いろはにはへと」のような芸術祭受賞作品ともなると、人気がいやが上にも高まり、スポンサーは宣伝効果をあげる。よい芸術祭番組を送ることによって、商品の信頼感も高められるとすれば、芸術祭番組に對

し、スポンサーは熱を入れ、経費をおしはず出し、また受賞を期待する。ラジオ東京は続けて三年連続芸術祭賞を獲得し、いつかドラマのKRという定評さえつくるようになった。こうして芸術祭のテレビドラマは向上するとともに競争もはげしくなっていくのだが、他面こうした発熱的狀態を、どこまで維持できるかに、逆に各局が不安を抱くようにさえなった。そこで芸術祭の期間に賞めあてのテレビドラマが作られるのではなく、テレビの性格から、日常製作活動の中にたえず作品向上がはかられるのが望ましいという主張から、芸術祭期間中の作品でなくても、期間中に再放送できるものは芸術祭参加として認めることになった。しかし現実にはこの年の芸術祭の参加作品は、従来とかわりなく、芸術祭期間中に発表されたもののみが参加し、経費も以前を上廻るとも下るものでは決してなかった。

この当時はまだ放送界全体に賞が少なく、芸術祭のテレビ部門はテレビ放送開始と同時にじまっただけに、伝統と稀少価値がその存在をゆるがせにできないところまで権威づけられていたといえよう。

この年はカラーテレビが本放送となり、カラー番組の参加も認められ、日本テレビの光子の窓の「イグアードンの卵」がカラーで参加し異彩をはなつた。

テレビにいささかおられ、参加本数が少なくなってきたラジオが、また参加本数を増してきたのも特徴のひとつといえよう。十一回三十六本と下り気味になったものの、十四、十五回は三十本へといささかもり返してきた。

この年には音の機能を生かすことにラジオが真剣となり、音楽性を引っこめ、むしろドラマを主体にし、その中で音響としてのドラマチックな詩を作ろうとする傾向が顕著になった。「渦潮」「海鳴り」等題名からも察しられるように、自然音を音響に駆使し、ドラマの発展や起伏に生かそうとする試みや、音響、音楽、言葉組合せての詩劇の構成を試みた作品の進出がめだつてあらわれてきた。そこにはテレビと同じような、騒々しい競争時代をすぎた「ラジオ」があった。

第十六回 芸術祭

ハ古典の大衆化

これまで芸術祭の主催公演として、恒例のように行なわれてきた能楽の主催公演は、毎年その趣向をこらし十四回まで続けられてきたものの、能楽の宿命ともいえるべき時代的な差異は、興行システムの如何にかかわらず、一般大衆を吸収することが困難で、第十四回をもって、一応休止の恰好となっていた。

そこで本年度は、これまで能番組の中で行なわれていた狂言のみを、切り離して四番ずつ三回、都合十二番上演するという、異例の公演を行なうことにより、古典の大衆化を図ったのである。

狂言は能と異って、筋立てがはっきりし、しかも内容が非常に庶民的、現実的なものであり、古典とはいえ、容易に現代人の共感を呼び得るものであって、むしろ広く一般に開放されることにより、支持者を多く見出すことができらるであろう。また能、狂言の鑑賞は、これまでごく一部の鑑賞に止まり、しかも、それも自分の属する流派に限って見るといった弊風があり、さらに世上ともすれば能に対し狂言は附属物のように考えられ、正当な評価を与えられないうらみがあつた。

そこで、狂言という完成された古典喜劇のもつ面白さ、演劇としての卓拔さを、広く一般に独自の形で紹介するこ

とにより、古典の大衆化を図ろうとして、芸術祭主催の「芸術祭狂言の会」が開催された。

公演の趣旨に賛同して、大蔵流から茂山弥五郎、山本東次郎、茂山千五郎ほか八氏、和泉流から野村万蔵、三宅藤九郎ほか十氏の出演があり、狂言界を挙げて一堂に競演するという豪華番組となり、十一月二十四日昼、白木ホール、二十五日昼夜、水道橋能楽堂の三回公演で、総数約千三百人の観客を集め、成功をおさめることができた。

なおこの狂言の会は、翌年の第十七回芸術祭にも引き続いて行なわれ、前年度企画の候補にあげながらも、経費その他の関係で見送られた「唐相撲」の上演をみることもできた。京都の茂山千五郎家の家の芸ともいべき本曲は、東京ではめったに上演されることのない出し物で、大蔵流を打って一丸とするこの「唐相撲」は、ジャーナリズムの上での呼び物となり、当夜の能楽堂は満員の盛況をみせた。また一時間番組で、NHK教育テレビから、この「唐相撲」と「瓜盗人」の二本が全国放送されたことも、芸術祭古典の大衆化、普及化に大きな役割を果たすものとなったといえよう。

十六回の「芸術祭狂言の会」に際して、新聞評の中に「能の会ではちょっと例のない、舞台と客席の生き生きとした緊密な交流を感じ、伝統芸術たる狂言の不滅の生命をひしひし感得せしめ」とあったのも、公演の成果を裏書きするものといえよう。

この公演の実現には、企画担当の委員の尽力はもちろんのこと、狂言界の協力、白木狂言の会、朝日新聞社等の共催があったことを附記しておこう。

ハラジオ・テレビドラマ募集Ⅴ

時代の推移とともに、マスコミ、ラジオ、テレビの発展にともなって、本年から芸術祭のためのラジオドラマおよびテレビドラマ脚本の募集ならびにその放送が企画実施された。これは第八回芸術祭から行なわれた、演劇脚本および

び楽曲の募集と公演にならったものだが、脚本は第十二回、楽曲は十三回で打ち切りになったことに代るものでもあった。

ラジオ、テレビは現代人の日常生活に深く入りこんでおり、すぐれたドラマ脚本への需要は制作者側はもちろんのこと、視聴者側にも強く要望されているところであった。この脚本募集はそうした近來の趨勢にこたえて採り上げられたもので、これを今後何回か引き続き行なうことによって、優秀な放送作品ないし有望な放送作家を発掘しようという意図されたものであった。

この脚本募集は、その入選作品は芸術祭主催公演として必ず放送するという前提で企画されたのであったが、幸いに放送各社の全面的賛同が得られ、初年度はラジオドラマが文化放送（地方十一局にネット）、テレビドラマが東京放送（地方二十局にネット）の協力によって実施されることになった。

応募状況は次のようなものであった。

まずラジオドラマ脚本は、応募総数二三七編（うちに二名による共作二編）で、地域別にみると東京都（八一）、大阪府（十四）、神奈川県（一三）がもっとも多かった。応募者は年令七八歳から最年少一四歳まであり、二〇歳、四〇歳が大半を占めていた。職業別にみると、記入のないものが六二、無職三〇、会社員二五、工員店員二五、教員二〇がおもなもので、その他学生、主婦、日雇労働者、マッサージ師、板前等多彩なものがあった。また女性の応募が多く七〇名が女性だったことも注目される所だ。

テレビドラマの方は、応募総数三〇二編（うち二名共作一編、三名共作一編）で、うち六五編が女性のものであった。地域としてはラジオの場合同様、東京都（一一）、神奈川県（二八）、大阪府（二〇）、千葉県（一一）などが多く、応募者の年令は二〇代（一一〇）、三〇代（九七）、四〇代（二三）で大半を占め、最高七三歳から十二歳（小学生）までであった。職業は記入なし（五四）、会社員（四四）、無職または家事手伝い（四二）、学生・生徒（二九）、

教員(二九)などが多い方で、なかには華道教授、映画監督、自衛官、真珠作業婦、僧侶、家裁調査官などがあって、その幅の広さを示した。

以上の応募作品のうち、入選して芸術祭賞を得たラジオドラマは、脚本は白井信太郎「ある老潜水夫の話」、テレビドラマ脚本は、山浦弘靖「賊殺」であった。前者は三六年一月九日、文化放送「現代劇場」の時間に、小沢栄太郎の主演で放送され、後者は三六年一月二二日、東京放送「日曜劇場」で、西村晃、伊藤雄之助、朝丘雪路、清水元などのベテラン俳優によって演じられ放送された。なお、テレビドラマの方は、モンテカルロにおける第二回国際テレビ祭にも出品された。また、テレビ脚本の佳作に入賞した宇津木十四男「空しき便り」も東京放送テレビから、「絆(きずな)」と改題され放送されたことを附記しておく。

△芸術祭十五年史の刊行▽

芸術祭も十六年目を迎えた。主催公演とも、ほぼ定着した態勢が整った。参加公演も年々その数を増し、第十五回は二五一公演、第十六回は二六八公演となり、特に演劇、舞踊部門、さらにラジオ、テレビと現代芸術の参加が目立ってきた。半面とかく斜陽化しつつあった映画が減じはじめた。

テレビ、ラジオにおいては、見てわかり良く、聴いて楽しめる作品がふえ、深刻なもの、難解なものが減少し、いろいろな年齢階層の人が親しめ、しかもそれなりに芸術性を盛り込もうとした作品意図が強く感じ取られるようになった。とくにドキュメンタリーものが、好成果をあげる結果となってあらわれた。

主催公演として主だったものに、東宝現代劇の「放浪記」があり、森光子演ずる林芙美子の演技が光り、また十一月三十日の榎尾を飾る創作長唄「親鸞」が、四年前の「新・平家物語」以来久々の公演として、長唄界の総力を結集して催された。さらには映画で、従来の「映画の歴史を見る会」「芸術祭記録映画鑑賞会」の他に、「外国映画秀作

カヴァルケード」と銘打って、戦後日本に輸入された外国映画で、七か年という期限内で上映を許されている各社在庫プリントの中から、秀作、異色作を選出し、池袋人生座で十月一日から十二月五日まで二か月にわたり上映した。

この他にも毎年恒例の「全国民俗芸能大会」のほか、大衆芸能部門の主催として、「芸術祭受賞・落語三人会」が三越劇場で催され、過去芸術祭賞を受けた、桂文楽、古今亭志ん生、三遊亭丙生の三人を一堂に集め、演題もそれぞれ受賞されたものの再演のほか、自選ものを加えた、一人二席を語る企画で、落語の粋をじっくり味わせることに成功した。

芸術祭も十五回を数えるに至ると、星移り人変って、その歩んできた道がまず資料面から定かなくなりつつあり、この機会に関係者の協力も得て、芸術祭の資料を整えておこうという意図から、また、まだ一般に芸術祭の全貌およびその変遷がよく知られていないという点もあり、この際、芸術祭の歩んできた過程をありのままに示しておく必要から、この年『芸術祭十五年史』の刊行が行なわれた。

関係者の協力によって、まず本文篇A版約二五〇頁が、十一月一日の芸術祭祝典を期して刊行配布され、年度末に資料編が、A版約三百頁となって刊行された。

本書、三十年史が発刊されるに際しても、この十五年史における資料の収集、全体の流れ歩みが、一応この時期にまとめられたことが、大きなステップをなしていることはいうまでもない。おそらく今後五十年史、百年史という歴史を芸術祭が関するならば、この十五年史はその道標の第一歩として、価値ある存在となるであろう。

△第十六回芸術祭総覧抄録▽

芸術祭の概要 文部省芸術祭は、「すぐれた作品の公演発表をうながして芸術の創造と進展に寄与するとともに、あわせてそれらすぐれた作品の公開により、芸術鑑賞の機運を醸成し国民文化の向上をはかる」ために、毎年十月および十一月を「芸術祭

期間」として開催されている。(昭和二十一年に第一回が開かれ、ことしは十六回目にあたる。)芸術祭の「部門」は演劇、音楽(放送によるものを含む)、舞踊、能楽、映画、ラジオ、テレビ、レコード、大衆芸能、民俗芸能(主催公演のみ)の十部門である。ひとくちに「芸術祭公演」という中には「主催公演」と「参加公演」の二種類があり、主催公演とは文部省芸術祭執行委員会がみずから主催するもの、あるいは関係各界の協力を得て共同主催するものことで、これに対しては文部省から公演経費の一部が補助される。参加公演というのは、芸術祭に参加を希望するものの中で芸術祭にふさわしいものとして認められた公演のことである。(芸術祭参加に関する賞状、手続、留意事項等は、その年度の「芸術祭参加規程」で定められることになっており、例年七月ごろ公表され、八月一日から参加申込の受付が開始される。)これらの公演のほか期間中には芸術祭祝典が開かれ、また芸術祭のための楽曲、脚本等の募集が行なわれることもある。(第十六回以降、ラジオドラマ、テレビドラマ脚本を一般から募集し、入選作を主催公演として放送しているのがそれにあたる。)次に、芸術祭の「実施機関」は、年度ごとに文部省に置かれる文部省芸術祭執行委員会であり、委員には各界の学識経験者が多数委嘱され、それぞれ企画や審査を分担することになっている(会長は文部大臣、委員長は委員の互選、事務局は文部省芸術課)。芸術祭終了後、芸術祭公演のうち優秀と認められたものには、文部大臣から芸術賞(賞状および賞金五万円)または芸術奨励賞(賞状および賞金二万円)が贈られる。(授賞式は例年一月中旬)

主催公演 まず、演劇部門では東宝現代劇「放浪記」および劇団俳優座の新劇「お前の敵はお前だ」の二公演、音楽部門では長唄協会による「創作長唄『観世』発表会」、能楽部門では「芸術祭狂言の会」、映画部門では池袋・人世座で「外国映画秀作カヴァルケード」、山梨ホールで「映画の歴史を見る会」および「芸術祭記録映画鑑賞会」の三公演が行なわれた。さらに大衆芸能部門では三越劇場で「芸術賞賞落語三人会」および「芸術祭名人会」、民俗芸能部門では日本青年館で「第十二回全国民俗芸能大会」が行なわれた。このほか本年度は「芸術祭のためのラジオドラマおよびテレビドラマ脚本」の公募が行なわれ、その入選脚本によるラジオドラマおよびテレビドラマ作品が、それぞれ文化放送と東京放送から主催公演として放送された。

参加公演 まず参加数については二六八公演の多きに達し、前年度の二五一公演をさらに上まわった。とくに増加が目立ったのは演劇部門と舞踊部門であり、ラジオ部門とテレビ部門も若干ふえ、映画部門は逆にやや減じた。公演(作品)内容については、いずれの部門も特に拔群と言える成果を示したものは無かったが、参加公演全般に水準向上のあとが認められた。

芸術祭十五年史の刊行 前年度芸術祭をもって芸術祭が十五年を終たことを記念し、事務局はかねて本書の編集に着手してい

たが、うち本文編は十一月一日の第十六回芸術祭祝典当日を期して刊行され、関係者に贈られた。資料編は別冊として三月刊行配布された。

参加規程の一部修正 本年度の新しい試みとして「芸術祭合唱曲コンクール」を行なうため、参加規程第一項にその旨が付け加えられ、その参加については別に「芸術祭合唱曲コンクール規程」によって定められた。また、映画部門のうち日本記録映画については、これまでの名称「日本非劇映画」「日本記録映画(動画を含む)」と改称し、および本年から参加作品数に制限を設け、各社年間製作本数二十本以上は二本以内、二十本以下は一本とされた。(なお参加作品は三五ミリであるべきことが明記された。)外国映画については、作品の種類を「劇映画、記録映画、動画」と明示し、劇映画以外の作品についても参加をうながすとともに、授賞の選考に際しても劇映画と区別して行なえるように配慮された。さらに大衆芸能部門の規定については、かつこ書きの中に「漫才」「その他」を付け加え、かつこ書きが例示であることが明確にされた。

第十七回・第十八回芸術祭

△芸術祭祝典・N響特別演奏会▽

芸術祭は第五回公演から、毎年芸術祭祝典を、十一月三日の文化の日、あるいはその前後において催してきた。

第十七回の祝典は十月三十一日、上野の東京文化会館で挙行されたが、はじめての試みとして、祝典を音楽会の形式で行い、これに広く一般の音楽愛好者二、〇〇〇人を無料招待した。祝典の趣向については、毎年事務局が苦心するところであるが、芸術祭をできるだけ広く一般参加のものとするためにこの計画が立てられたものである。

もちろん、こうしたことの実現には各界の協力なくしてはできず、日本放送協会、NHK交響楽団、東京文化会館の一貫した協力に負うところ大であった。

第一部祝典、第二部特別演奏会にわかれ、二部において、森正指揮によるNHK交響楽団により、「歌劇『売られた花嫁』序曲」(スメタナ作曲)、「ピアノ協奏曲」(三善晃作曲)、「交響曲 第七番イ長調」(ベートーベン作曲)の三曲が演奏された。大ホールは開会前から観客で埋めつくされ、N響のすぐれた演奏にききほれた。特に曲目のうち、三善晃氏の作品は、この日初演のものであり、後日NHKで放送され、音楽部門として芸術祭賞を受けたのみならず、年度の作曲界のすばらしい収獲のひとつという、高い評価を受けたものである。

第十七回の主催公演として、演劇では、早稲田大学創立八十年を迎えるに当って、創立者の大隈重信を劇化した久板栄二郎作「人生百二十五年」が歌舞伎座で、尾上松緑の大隈重信を中心に、松竹傘下の歌舞伎俳優をすぐって行なわれた。さきの第十三回に、慶応義塾大学創立百年を記念しての池田弥三郎作「慶応戊辰年」が主催公演として上演されただけに、早慶が歌舞伎舞台で奇しくも競ったわけである。(芸術祭随想の高橋誠一郎「芸術祭早慶戦」参照)

この他に前に述べた「芸術祭狂言の会」、映画は、従来のものに、昨年の「外国映画秀作カヴァレード」に代って、本年は「世界の映画(映画芸術の世界的展望)」が池袋、人生座を会場として公開された。これは現在わが国で上映されている世界各国の作品の中から、それぞれの国が持っている特色や傾向なり、その国の映画作家の手法などを容易に掴みとることができるよう代表的な作品を選択し、これを製作国単位にまとめて順次上映するというものである、世界十三ヶ国、長短あわせ六六本、映画作家総勢六四人の珠玉の作品が上映された。

ともすればテレビに観客をうばわれ、観客を失いつつある映画界にあって、こうした一つの視点に立つ系統的な映画鑑賞は、映画愛好者をつなぎとめるためにも、興行者側も考えなければならぬ機にさしかかっており、その意味でも、芸術祭の映画鑑賞はその先駆的実験をなしているものといえよう。

△地方交響楽団の育成▽

第十七回から特に注目すべき主催公演に、群馬、札幌、京都の各都市にある交響楽団が一堂に競演するという「芸術祭三市交響楽団特別演奏会」が行なわれたことであろう。

群馬交響楽団の成立はふるく、映画「ここに泉あり」でも知られているように、地方都市では、育て難い交響楽団を今日まで育て守りつづけてきている。それは札幌、京都においても同じである。市民の中に育ち、地域を中心に活動をつづけてきている全国に数少ないこうした専門楽団が、台同の演奏会をもったということは、音楽史上まさに画

期的なことといっている。

しかもこの公演が芸術祭の主催公演として成立したことは、芸術祭を中央のものとのみせず、地方の芸術振興に對し意義ある催しとするためにも時宜を得た公演といえよう。

この企画は高崎市および群馬交響楽団から文部省にもち込まれ、さいわい、加わる京都市・京響、札幌市・札幌の積極的な熱意と協力によって実現した。

十二月三日群馬県高崎市の群馬音楽センターで、群馬（指揮・甲斐正雄）がベートーベンの交響曲第七番、札幌（指揮・荒谷正雄）がモーツァルトの交響曲「ハフナー」とハチャトゥリアンの「仮面舞踏会より」、京響（指揮・ヨアヒム・カウフマン）がチャイコフスキーの交響曲「悲愴」を演奏、大ホールには二千余の市民がつめかけ熱気をはらんだ雰囲気の中で、商業楽団にみられない気力のみなぎった新風を芸術祭に送ったのである。

この公演は、翌三十八年度第十八回芸術祭は札幌市民会館で開かれ、つづく三十九年度第十九回芸術祭では京都市会館第一ホールで開かれた。京都市の高山義三市長は、「この演奏会は、文化交流の形で行われる『都市外交』を実現する願ってもない場である」といい、高崎市の佐谷啓三郎市長は「三市が放送のみに依存せず、おのおのその地域社会に密着し、地域の音楽進歩と共に団体の維持、伸長を図るということは、日本の交響楽の歴史に新しいページを開くものである」といい、札幌市の原田与作市長は「やがてそれぞれの地における芸術文化の代表的担い手として成長し発展する契機となる」だろうと、この公演に對する期待を述べた。

△大衆芸能の浸透▽

第五回、第六回の芸術祭で、「名人会」が行なわれてはいるが、大衆芸能部門の主催公演として本格的に出発したのは第十五回の「芸術祭バリエテ」からである。

芸術祭をより大衆の生活の中にという要請は多く、そのため芸術祭も映画、ラジオ、テレビというマスコミを対象にしたメカニズム芸術に對しひろく参加の門を開き、また舞台芸能として長く日本の支持を得てきた門口の広い大衆芸能の分野に對しても、その門を拡張し、ほとんどのジャンルのものが参加し得る体制となった。

しかし大衆芸能の中には、マスコミの寵児となって興行的に隆盛をきわめているものもあれば、伝統的価値をもちながらも、今日世間の関心外に置き去られているものもある。そこで第十七回はとかく大衆から忘れ去られようとしている大衆芸能・講談をこの機会に取りあげ、助成をはかろうという目的で「講談芸術祭」を開催した。

そしてわが国で唯一つとなつてしまつた講談の席、上野・本牧亭を公演場所とした。本牧亭を選んだのも、講談の維持存続にこれまで犠牲的努力を払ってきた同亭の隠れた功績をたたえつつ、この講談寄席がひろく知られ親しまれることにより、必然的に講談鑑賞への関心をおこそうと企図したものである。

公演は講談界の総力を集めた画期的なものとして、関西の第一人者的存在である長老旭堂南陵にも出演を乞い、一龍斎貞丈、宝井馬琴、神田伯山等現諸講師の粋によつて、各自得意の演題をかけた公演が行なわれた。それは「講談に関する限り、この公演は戦後最大なもの（東京M紙）」と評価された。

会期は四日間、収容力二百名の狭い会場ながら、平素は四、五十名程度の入場者であつたものが、連日満員の盛況を迎えたことは、明日の講談界に明るい灯を点するものとなつた。

参加公演においても大衆芸能部門の進出は著しく、参加本数も第十六回の十六本から第十七回が二四本と約倍に、第十八回が二七本と参加数を増している。しかし種目の増加したわりには、企画演出等に傑出したものがなく、授賞は両回とも奨励賞のみであつた。

第十七回はレコード部門において外国盤（海外録音原盤によつて製作されたものの）参加が久しぶりに復活した。ステレオの普及が伸び、業界一般が活気を呈してきた状況からも、外国盤の参加に對する待望がおのずからたかま

てきただけに、参加本数も多く、九社二四作品五十五枚に達し、その水準は高いものがあつた。

その種類は声楽、器楽、管弦楽、歌劇さらには民族音楽までにわたる広範なもので、質的に高度で、授賞の審査も難航した。中でも特に群を抜いて好評だった「平均率クラフィア曲集」(エンジェル)が芸術祭賞となり、四本の奨励賞が選出された。

外国盤だけでなく、国内盤も、双方を通じてレコード部門は総体にこの期水準の高いものが多く、レコード部門の授賞の数が多くなったが、それでも従来にくらべ、まことにからい選考であつた。

△世阿弥生誕六百年記念展▽

古典芸能の中でも格調高い主催公演として毎行なわれてきた能楽公演は、第十四回で一時中止となり、その代りに比較的一般に理解されやすい狂言をもって、第十六、第十七回の芸術祭主催公演が行なわれた。しかし、昭和三十八年の第十八回芸術祭は、この年が能楽の親世阿弥の生誕六百年に当たるといので、当然のことながら早くから能楽界あげての記念行事として「芸術祭能」が企画された。

企画の段階で問題となつたのは、その番数と会場である。これまで能楽公演はこのことに、企画委員は苦心してきている。芸術祭のねらいは一般によびかけて能楽への関心と理解をよびますことにあるから、その意味で通常の能会のような重い曲をいくつか並べることだけでは当を得ない。能一番、狂言一番、半能一番ぐらい、時間にして二時間前後が適当だろうということになった。

会場については広く大衆を収容する意味で日比谷公会堂を選んだが、一歩進んで、真に能の良さを味わせる意味で観世会館の二箇所を選んだ。演目については当然のことながら、世阿弥の作品を中心に選び、日比谷はどちらかといえば初心者むき、能楽堂は愛好者むきというように、番組に変化をもたせて企画された。

なお日比谷における能舞台をどうするかについて、舞台装置家の遠山静雄氏に依頼し、能楽堂における演能の本来的なものを失わず、しかも広大な会場にたえ、大衆に違和感を与えない能舞台を特設した。それは無柱、無蓋、背景、照明にも工夫をこらし、目付柱を単純化した斬新的な能舞台を生んだ。

この「芸術祭能」は、日比谷の第一日目(十一月一日)の公演が芸術祭祝典の行事の一環にくりこまれ、半能「頼政」、狂言「観猿」、能「猩々乱」の三曲が、無料招待者二〇〇〇人の観客の前でくりひろげられた。この日の大半は若い観客層で占められ、初めて能を見たという人たちも少なからず含まれていた。

因にこの無料公開は一般からの往復はがきによって徴したものだが、申込数は六、五〇二通、その内都内八二%、関東附近一七%、年令層は十代一一%、二十代四四%、それ以上が二〇%であつた。

第十八回は、三年ぶり日本舞踊協会が毎年開く日本古典舞踊の会に、特に芸術祭のための企画性をもたせ、数ある日本舞踊の名作をその内容によって分類し、その最も適当と思われる舞踊家に踊ってもらふという、日本古典舞踊の粋をあつめる方向で企画が立てられた。この時期は舞踊界の最も活潑なシーズンであり、当初の期待通りに出演者を網羅することはできなかったが、一応の企画案通りの方針によって歌舞伎座を舞台に競演が行なわれた。特に今回は歌舞伎座の三階席を大衆料金とし低額料金として開放した。

△第十七回芸術祭総覧抄録▽

主催公演　ことし主催公演は、まず演劇部門では松竹の「人生百二十五年」、東宝の「悲しき玩具」、文学座の「守銭奴」の三公演を、音楽部門では芸術祭祝典を兼ねて「N響特別演奏会」を、能楽部門では「芸術祭狂言の会」を、映画部門では池袋・人世座で「世界の映画」、ヤマハホールで「映画の歴史を見る会」および「芸術祭記録映画鑑賞会」の三公演を行ない、うち「映画の歴史を見る会」は大阪、松江、出雲、福島でも公演を行なった。さらに大衆芸能部門では上野・本牧亭で「講談芸術祭」を、民俗芸能部門では日本青年館で恒例の「全国民俗芸能大会」を開催したほか、前年に引続いて芸術祭のためのラジオドラマ

マ、テレビドラマ脚本を一般から募集し、その入選作品はラジオはニッポン放送、テレビは日本教育テレビから主催公演として放送された。なお、京都市、高崎市、札幌市と共同主催して「芸術祭三市交響楽団特別演奏会」を群馬県高崎市において開催した。ことしの主催公演の中で特筆すべき地方公演であった。

参加公演 まず参加数については総数二五七公演で、前年度よりやや減少した。参加数はここ数年増加を続けてきたのであるが、これによってみると、前年度あたりが数量的にはほぼ限界点であったものと考えられる。さてこのたびは演劇の参加の少なかつたことが目立つのであるが、これは小劇団や児童劇団が地方公演その他で余り参加しなかつたためのものである。

参加規程の一部修正 本年度は参加規程二の(3)として、「参加作品は、ラジオならびに放送による音楽の場合を除き、東京で参加するものに限る」という一項が加えられた。主催公演はもとより参加公演においても地域はできる限り広げることが理想であるが、ラジオおよび放送音楽の場合以外は、これまでも審査その他の制約から東京で参加するものに限られてきた。すなわち従来慣行として処理されてきたことではあるが、このたびは明文化した。次には、規程三の(2)および(3)に「ドキュメンタリーのようなかもので芸術性の高い作品を含めてよい。」という字句が挿入された。これも、これまで執行委員会と放送局側の了解事項として認めてきたものの明文化である。第三に、レコード部門に外国盤レコードの参加を復活させるため、規程三の(4)が大きく改正された。すなわち外国盤とは「外国で演奏吹込まれ、期間中はじめて発売される音楽レコード(軽音楽を除く)」をいい、参加作品は「各社三組以内」、ただし「うち一組は一枚物とする」とこととされた。一枚物を含める条件をつけたのは、一般愛好家の入手しやすい鑑賞用レコードにすぐれたものを製作してほしいという趣旨である。また国内盤の方も参加作品数については、従来四組以内を「五組以内とし五組参加する場合は、うち一組は大衆歌曲とする」ことに改められたが、これは流行歌、ホームソング、こどもの歌等の大衆的なものに優秀な芸術系レコードの出現することを期待したものである。

第十八回芸術祭総覧抄録Ⅴ

主催公演 演劇部門では松竹の歌舞伎「菅原伝授手習鑑(寺子屋)」、東宝の現代劇「女の旅路」および文学座の久保田万太郎追悼公演「雨空」「萩すき」の三公演が、舞踊部門では「邦舞芸術祭」公演が、音楽部門では世阿弥生誕六百年記念「芸術祭能」が、映画部門では人世坐で「世界の映画(内外監督代表作選集)」、山葉ホールで「映画の歴史を見る会」および「芸術祭記

録映画鑑賞会」の公演が、ラジオ、テレビ両部門では、東京放送およびフジテレビジョンよりそれぞれ公募脚本入選作品の放送が、民俗芸能部門では恒例の「全国民俗芸能大会」が実施され、また地方公演としては、札幌市において京都市・札幌市・高崎市と共同主催の「三市交響楽団特別演奏会」、ならびに大阪市、米子市、岡山市の三都市において「映画の歴史を見る会」が開催された。恒例の「芸術祭祝典」は「芸術祭能」(四日間)の第一日(十月一日)が充てられ、一般から約二、〇〇〇人を無料招待した。

参加公演 参加総数は二八六公演に達し、芸術祭始まって以来のものとなった。しかし、参加が数量的に盛大をきわめた反面、部門によってはいちじるしく玉石混淆のきらいがあったことが論議の対象となった。すなわち、芸術祭公演としての水準を高く維持するためには、参加を承認するに当ってよりきびしく規制ないし調整すべきではないか、という意見が提出せられた。

参加規程の一部修正 本年度は、テレビ部門におけるNHKの参加作品数を、これまでの「七作品以内」から「九作品以内」に改めた。△規程三の(3)▽これはNHKの中央放送局(地方七局)の制作体制が整備・充実されてきたのを考慮して増加したものである。次に、参加手続のうち申込受付期間を十五日くりあげた。△規程四の(1)▽これは公演当日と申込期間の間をひろげることである。次は、参加承認にともなう事務処理を円滑ならしめようとしたものである。次に、合唱曲コンクールの参加作品数を「一社一作品以内」から「一社二作品以内」とし、「二作品参加の場合は、うち一作品は十五分以内のものに限る」とこととした。△合唱曲規程三の(2)▽これは参加各社が作品に多様性をもたせて出品できるようにしたものであり、二作品のうち一作品を十五分以内のものに限定したのは、従来とくく大作主義に偏しているきらいがあるので、この際十五分以内の小作品や中編にもすぐれた作品の出ることを期待したものである。

第十九回芸術祭

ハオリンピック芸術展示

昭和三十九年（一九六四年）の秋は、世紀の祭典「東京オリンピック」が開催された年である。オリンピックはスポーツの祭典ではあるが、一九〇六年クーベルタンがそのプログラムに「芸術競技」（建築、文学、絵画、彫刻）を加えることを提案し、一九一二年のストックホルム大会から実施に移され、一九五二年ヘルシンキ大会以後は「芸術展示」（Arts Exhibition）の名のもとに、各国それぞれの特色や様式をもって行なわれてきたものである。

「東京オリンピック」における芸術展示に関しては、第五八回国際オリンピック委員会総会（一九六一年アテネ）で、「日本最高の芸術を展示する」という根本方針が承認され、これを受けてオリンピック東京大会組織委員会は、「スポーツ芸術に限定せず、また原則として日本固有のものを展示し、諸外国からの参加は招請しない」という基本条件を決定した。

こうして昭和三十六年七月には組織委員会に「芸術展示特別委員会」（委員長細川護立）が置かれ、展示種目の内容について検討を重ね、芸能部門の展示として、歌舞伎、人形浄瑠璃、雅楽、能楽、古典舞踊、邦楽、民俗芸能を採り上げることにした。

東京オリンピックの競技期間は十月十日から二四日の一五日間である。したがって芸術展示は当然十月を中心に設計されるわけだが、この時期は例年、文部省は芸術祭を、東京都は都芸術祭を開催する時期にあたっている。そこでオリンピック東京大会組織委員会、文部省（文化財保護委員会を含む）、東京都の三者は、十月における芸術祭行事を一本化し、総力を結集することを申し合わせ、芸術展示のうち芸能部門の前記六種目の公演は、これをオリンピックの「芸術展示」とするとともに、芸術祭主催公演、都芸術祭公演をかねるものとすることにした。

こうして今年度の主催公演は、伝統芸術の分野として、宮内庁楽部出演の「雅楽」、「オリンピック能楽祭」、「人形浄瑠璃文楽」松竹の「十月大歌舞伎（『寺小屋』ほか）」、「古典舞踊邦楽祭」、「全国民俗芸能大会」が、同時に「オリンピック芸術展示」として企画、実施されたのである。

この他に主催公演としては、演劇で東宝現代劇公演（『濃東綺譚』）、劇団民芸公演（『冬の時代』）、音楽では巖本真理ほかによる「芸術祭室内楽のゆうべ」、舞踊では「現代舞踊芸術祭」、映画では「映画の歴史を見る会」および「芸術祭記録映画鑑賞会」、大衆芸能で「喜劇特別公演」、ラジオ・テレビ関係では、中部日本放送および日本テレビによる公募脚本の入選作品放送が実施された。

この「オリンピック芸術展示」をかねた主催公演の中で、外人観客にもっとも人気を博したのは、歌舞伎で、二五、〇〇〇人の観客動員があった。わが国伝統芸能中やはり歌舞伎の知名度がもっとも高かったことを立証する。

けれども芸術展示の中で、もっとも成功したものの一つとしては雅楽があげられよう。短期公演の中では、全国民俗芸能大会と雅楽にもっとも外人観客が集中した。虎ノ門ホールで、宮内庁式部職楽部出演で三日間にわたって行なわれたこの催しは、入場無料ということもあって、国内でもはるばる遠路から観客が訪れ盛況をみせた。

また恒例の「全国民俗芸能大会」も、オリンピック展示にふさわしい、大構想、大規模のものが練りあげられ、東京文化会館大ホールで、これまで会場の規模の関係から上演できなかったような演目が組み入れられ、十月十七、十

八日の両夜をいどった。

これに反し「オリンピック能楽祭」、「人形浄瑠璃文楽」、「古典舞踊邦楽祭」は、それぞれが、一般はもちろん外人客に対しても、日本伝統芸術の代表的なものを受け入れ易いような親切な企画で上演したが、PRの不足等もあって苦心の割合には予期した観客動員を果すことができなかった。

△地方主催公演の充実▽

この年度のもう一つの大きな特色として、地方主催公演の充実を挙げることができよう。これまでも芸術祭主催公演の地方開催は行なわれてきたものの、予算措置が確立していなかったため、規模はささやかなものであった。幸い三十九年度芸術祭予算としては、額はともあれ初めて文部省が公演経費の一部を負担して行なう、芸術祭地方巡回公演の予算が計上され、計画的、組織的な地方主催公演が開催できることとなった。これまでの偶発的、散発的に行なわれてきた地方公演が、はじめて明確なレールの上に乗ったのである。

これまでの芸術祭の要望、批判に最も強く出ていた、芸術祭の中央偏重に対する課題、多年の懸案に対し、新たな局面を開くことができたのである。

この当時から地方に文化会館、市民会館といった芸術文化施設ができるようになり、中央からのすぐれた公演の巡回を要望する声もあがっていて、巡回公演の好機でもあった。

演劇による芸術祭巡回公演は、前年度の芸術祭受賞作品である「聖女ジャンヌ・ダーク」を演じた劇団雲に委嘱され、中村光夫書きおろしの新作「汽笛一声」をもって巡回された。この脚本は後に読売文学賞の戯曲賞を受けた作品である。総勢六十名、全国で十か所、十三ステージの移動公演が行なわれた。話題としてつけ加えると、「汽笛一声」の標題にたがわず、日本国有鉄道がこれを後援、また全国の初日が時代によりけりのある横浜市であけられ福岡で折返

し、最後に東京で披露公演となった。

演劇が西日本地区において公演を打ったのに対し、東北地区には、昨年度芸術祭奨励賞を受けた巖本真理ほか五氏による室内楽演奏団があてられた。

室内楽は交響楽と違って地味であり単彩で、その普及度はさらに低いので、巡回公演に当っては、その曲目をポピュラリティーのあるものとし、楽器の組合せも標準的なものとし、芸術的純度が高くしかも親しみやすい公演をねらいとした。

この巡回公演は、演劇の場合も室内楽の場合も文部省が公演経費の一部を負担し、残余は地元の共催者または入場料収入でまかなう方式をとったのであるが、山形県のごときは入場無料とし、他の三会場も二〇〇円以下の低額入場料で公開した。これは共催者たる県教育委員会が本公演の意義を理解し、積極的に準備を整えたからで、芸術祭主催公演の趣旨にかなった内容と形式で大きな成果を挙げ得たものである。

△芸術祭合唱曲コンクール▽

NHKと全国の民間放送局を対象にして、第十六回芸術祭からはじめられた「芸術祭合唱曲コンクール」の参加公演は、「職場、地域、学生等一般の合唱団でも歌い得る、すぐれた合唱曲を得て、これを広く普及させるため」に行なわれるようになったもので、第十六回が九編、第十七回、第十八回が九編、この年が十一編と年ごとに参加数をふやし、同時に漸次内容が向上して、職場団体や青年団とか婦人団体のような地域団体、または学生団体など一般の合唱団で歌うことのできるすぐれた芸術性豊かな合唱曲がこれを機会にどんどん作られてきた。

またこの年は地方の放送局が、その地方の民俗音楽や郷土の風物事蹟などを取りあげたものが、全体の半数もあって興味ある傾向を示した。

付記すれば、音楽部門参加のうち「放送による音楽」の参加については、これまでは芸術祭期間中に放送されるものに限られていたが、この年から、昨年度芸術祭終了後から本年度芸術祭開始前までに放送された作品であっても、芸術祭期間中に再放送されるものは参加できるようになり、年間を通じての音楽番組が充実するように図ったことや、またテレビ部門のなかを「テレビドラマ(テレビミニ・ジカルドラマを含む)」および「テレビドキュメンタリー」に区別したことなど、この年の参加部門で改正された。

△第十九回芸術祭総覧抄録▽

ことしの芸術祭で特記すべき点は、まず主催公演のうち伝統芸能六種を「オリンピック芸術展示」を兼ねるものとして開催し、「東京オリンピック大会」の好機にわが国伝統芸能の粋を内外の鑑賞に供するよう努めたこと。次に、とかく中央本位にすぎると言われる芸術祭をひろく全国各地に及ぼすため、演劇および音楽の地方主催公演を本格的に計画・実施したことである。また参加公演の方では、テレビ部門をテレビドラマの部とテレビドキュメンタリーの部にわけたことである。

主催公演 伝統芸能の分野では、宮内庁楽部出演の「雅楽」、「オリンピック能楽祭」、人形浄瑠璃「文楽」、松竹の「十月大歌舞伎」(「寺子屋」ほか)、「古典舞踊楽祭」、「全国民俗芸能大会」の六公演で、前述のように東京オリンピックにおける「オリンピック芸術展示」として企画・実施された。したがって、これらの公演は各関係団体の全面的協力を得たことはもちろん、関係官庁としてオリンピック東京大会組織委員会、文部省、東京都の三者が当初から共同して開催準備をすすめた。芸術展示以外の主催公演としては、演劇で東宝現代劇公演(「暹東奇譚」)、劇団民芸公演(「冬の時代」)、音楽で巖本真理氏ほかによる「芸術祭室内楽のゆうべ」、舞踊で「現代舞踊芸術祭」、映画で「映画の歴史を見る会」および「芸術祭記録映画鑑賞会」、大衆芸能で「喜劇特別公演」、ラジオおよびテレビ関係では中部日本放送および日本テレビによる公募脚本の入選作品放送が実施された。

以上はいわゆる「中央公演」であるが、地方各都市で開催する「地方主催公演」としては、劇団「雲」による演劇の地方巡回公演(西日本地区十か所で、中村光夫作「汽笛一声」を上演)および巖本真理氏ほかによる音楽の地方巡回公演(東北地区四か所で「芸術祭室内楽演奏会」)が実施された。これらは文部省が公演経費の一部を負担し、開催地の県・市教育委員会、公立文

化施設、新聞社、放送局等が共催者に加わる形で実施した最初の組織的な地方主催公演である。このほか京都市・高崎市・札幌市と共催の「芸術祭三市交響楽団特別演奏会」(京響・群響・札幌)が京都市で、「芸術祭交響楽地方公演」が青森県三沢市(札幌による)および静岡市(群響による)で、「映画の歴史を見る会」が高崎市で地元と共催で開催された。恒例の「芸術祭祝典」は十月一日に一般から約二千人を招待して前記、巖本真理氏ほかの演奏による「芸術祭室内楽のゆうべ」を兼ねて、挙行された。

参加公演 参加総数は二八二公演(前年度二八六公演)に達し、オリンピックの関係で参加公演は多少の減退を予想されたにもかかわらず、例年におとらぬ盛況をみたことは喜ぶべきことであった。

テレビ部門のなかをテレビドラマの部とテレビドキュメンタリーの部とにわけ、これまでドラマに含めて取扱ってきたテレビドキュメンタリーを取り出したことは特筆すべきであろう。

参加規程の一部修正 音楽部門のうち「放送による音楽」の参加については、これまでは芸術祭期間中に放送されるものに限られていたが、昨年度芸術祭終了後から本年度芸術祭開始前までに放送された作品であっても、芸術祭期間中に再放送されるものは参加できるように改めた。また、参加作品数を定め、NHK十作品以内、民放各社は各三作品以内とした。テレビ部門のなかを「テレビドラマ(テレビミニ・ジカルドラマを含む)」およびテレビドキュメンタリーにわけ、「テレビドキュメンタリー」の参加作品は、光学または磁気録音付十六ミリフィルムとし、作品の長さは二十分以上六十分以内」と規定した。また、参加作品数については、「ドラマとドキュメンタリーをあわせてNHKは九作品以内、民放各社は各二作品以内」とした。

第二十回～第二十二回芸術祭

ハオリンピック後の芸術祭

国を挙げての最大の行事であった、オリンピック東京大会が終って、芸術祭もやや新機軸を出しあぐみ、第二十回からはほぼ前年の踏襲といった形で行なわれてきた。この間行政機構の面でも変化があり、これまで文部省社会教育局の中にあつた芸術課が、昭和四十一年度には新しく独立した文化局に移された。さらに昭和四十三年には、文部省文化局と文化財保護委員会の業務が合体して、新たに文化庁が生まれるのである。

こうした一連の改組は、いうまでもなく文化行政というものを、これまでの教育行政から分離させることによって、文化に対する国の積極的な姿勢を高めたものといえるが、それにより実質的な飛躍をいきなり望むことは、なかなか困難なことであつた。

しかし文化に対する国の奨励策は、この機に実り、明治以来わが国が多年宿願としてきた国立劇場が、四十一年度秋に設立開場され、芸術祭も国立劇場と関連性を保ち、発展させる機運を開いたのである。

この間の芸術祭の主催公演は、ほぼ定着した方法、形式の中で行われ、参加公演は、第二十回の参加総数が二五七、第二十一回が三〇二、第二十二回が二七三と、芸術祭三十回を数える中で、参加のピーク時期となっている。

注目される主催公演

この年度の主催公演の中で、目あたらしいものをいくつか挙げてみよう。

まず第二十回芸術祭では、「芸術祭合唱演奏会」がある。これは前回に述べたが、芸術祭音楽部門では第十六回から「芸術祭合唱曲コンクール」を参加部門で行なってきた。職場や地域あるいは学生の合唱団でも歌うことのできるすぐれた合唱作品を得たいという趣旨のもとから始められたものである。

ことに最近では合唱人口の拡大とともに、健康にして芸術性が高く、わが国の風土にかなった新鮮な作品が待望されているおりから、この声にこたえるべく、放送局が強力な媒体となつて、日本の作曲界の高いところと、大衆の合唱とを結び付けようとして、こうした企画が生まれたものである。スタート以来数々のすぐれた合唱曲が生み出されたので、この年は過去四年間の受賞作品十四曲の中から、組曲「わたしの願い」(詩・高野喜久雄、曲・高田三郎)、組曲「嫁ぐ娘に」(詩・高田敏子、曲・三善晃、「岬の墓」(詩・堀田善衛、曲・園伊玖磨)、組曲「若人のうた」(詩・中沢昭二、曲・佐藤真)の四作品をえらび、東京混声合唱団に出演を委嘱し、十月十四日、森正指揮で、演奏会を行なった(虎ノ門ホール)。合唱の演奏会としては三〇〇円均一制という低料金であつたのと、身近に自分たちでも多少努力すれば歌える合唱曲の模範演奏が開けるといふことで、若い人たちの共感をよび、なごやかで、かつ活気ある会となった。

この他に、第五回以来久方ぶりに三曲のみによる主催公演「芸術祭受賞者三曲の会」、毎年といつてよいほど芸術祭の賞を受けている東京バレエ・グループの主催公演や、長期に渡り幅広い観客動員を図つて映画芸術に対する理解と浸透を図るころろみを実施した「世界名映画フェスティバル」(池袋人生座、約一ヶ月余、入場料一〇〇円)などが注目されよう。

第二十一回芸術祭では、国立劇場の開場歌舞伎公演が、主催公演の華やかな色どりをそえた。「菅原伝授手習鑑」

は浄瑠璃三名作の一つと称される古典歌舞伎の代表作であるが、この完全な通し上演は、幕末以来絶えてなかったものである。歌舞伎の原典の忠実な上演を意図する国立劇場がこれを探りあげ、全体を一部、二部とし、十一月、十二月の二か月にわけて上演するという、商業劇場ではほとんど企てられないことを実現させたのは、国立劇場発足にふさわしいことであると同時に、芸術祭にとっても意義深いものであった。

音楽部門の主催公演として、日本の伝統音楽を系統的に紹介、鑑賞する「語り物の系譜」(十月十四日、三越劇場)も興味ある企画だった。日本の伝統的な音楽には、語り物と歌物の系列があり、相互に影響しあいながら日本音楽は形成されている。これらのうちから極めて特殊な性格をもつ語り物の系譜をたずね、日本の音楽の歴史的な歩みをつづったのがこの会である。多少学術的な企画ではあったが、一流の芸を鑑賞したいという人々や、芸能史研究、邦楽研究家、学生、俳優といった人々の間に反響をよび、当日は満員の盛況となった。

音楽部門の主催公演では「日本歌曲の歴史」(十月十四日、イイノホール)も興味ある企画であった。わが国の洋楽的手法による音楽は、明治以来約百年の歴史をもつが、その黎明期においては、歌曲にすぎたものが多いところから、これを二夜にわたり、三七人の歌い手によって上演されたもので、藤原歌劇団と二期会とで戦前、戦後にわけて行なわれ好評を博した。

第二十二回芸術祭においては、前年開場された国立劇場を舞台としての主催公演が目立っている。歌舞伎公演としては、十月の「彦山権現誓助剱」、十一月は坪内逍遙作「桐一葉」のいずれもが全通し、さらには音楽部門で行なわれた「声明公演」、「邦楽古典鑑賞会」、「舞楽公演」、「文化文政の舞踊」がいずれも国立劇場において行なわれている。このうち「声明公演」は、インドに発生し中国を経て日本に到り、わが国の古代から中世にかけて栄えた宗教音楽で、法相宗薬師寺と高野山真言宗に伝えられるものが演奏されたが、黛敏郎氏のみごとな解説とあいまって、満場の聴衆にそのすぐれた音楽性を再認させた。

「邦楽古典鑑賞会」は、正徳一年(一七一二)から明治の初めまでに生まれた日本音楽のうち、箏曲、尺八曲ならびに三味線音楽の名曲から選んで編成したもので、重要無形文化財保持者(人間国宝)や日本芸術院会員クラスの一流豪華メンバーによって行なわれた。

「文化文政の舞踊」は、この期が歌舞伎音楽としての長唄、常磐津、清元の三流が完成した時代であり、それにもない舞踊も爛熟完全の域を示した。そうした時代の舞踊を坂東三津五郎、西川鯉三郎、花柳寿楽、吾妻徳穂など当代名手の手で、すぐれた舞台としたものである。

これらはいずれも、古典芸術をとりあげ、その発生した時代をたどり、正しい復元をこころみ、現代人の眼で価値の再発見を志したもので、いずれも通常の公演では望み得ない芸術祭主催公演ということができよう。

このほかに能楽主催公演で、五百年の昔から民俗芸能の形で古風を残し伝える、山形県の「黒川能」を水道橋能楽堂に招致し、公演したことも、古典の再認ということで、芸術祭主催公演を感銘深いものにした。

八 第二十回芸術祭総覧抄録Ⅴ

ことしで芸術祭は二十年を迎えた。そのための記念行事は別に行なわれなかったが、恒例の芸術祭祝典には富陵宮同妃両殿下の御臨席があり、芸術祭の充実・発展とわが国芸術文化活動の隆盛を希望される旨のお言葉があった。

主催公演 東京を開催地とする「中央主催公演」としては、演劇部門で松竹の「十一月大歌舞伎」(新作「細川ガラシャ夫人」ほか古典物数種)、東宝現代劇公演「霊界様と人間さま」、劇団俳優座公演「日本の幽霊」の三公演が、音楽部門では「芸術祭祝典・交響楽のゆうべ」、「芸術祭受賞者三曲の会」、芸術祭合唱曲コンクール入賞作品による「芸術祭合唱演奏会」の三公演、舞踊部門では「東京バレエ・グループ芸術祭公演」が、映画部門では「映画の歴史を見る会」、「芸術祭記録映画鑑賞会」および「世界名映画フェスティバル」の三公演が、ラジオ・テレビ両部門では、朝日放送および東京12チャンネルによる公募脚本の入選作品放送が、大衆芸能部門では「名作落語を楽しむ会」が、民俗芸能部門では恒例の「全国民俗芸能大会」が実施された。ま

た地方各都市で開催する「地方主催公演」としては、前年度はじめて組織的巡回公演の計画をたてて実施した形式をことしも継承して、劇団文学座による演劇の地方巡回公演（西日本および北陸地区四か所）で「ホフ作「かもめ」を上演」および東京バレエ・グループによる舞踊の地方巡回公演（東北地区四か所）でバレエ「ハムレット」ほかを上演が行なわれた。このほか「交響楽地方公演」（静岡・浜松両市、群馬交響楽団演奏）と「映画の歴史を見る会」（九州および近畿地区三か所）が実施された。

参加公演 二五七公演（前年度は二八二公演）。前年度よりかなりの減少であった。参加数の消長を部門別に見渡すと、特に演劇・音楽・レコード・大衆芸能等が質量ともに充実していたこと、これに対してテレビドラマの参加が放送局側の製作事情と番組スポンサー会社の不況等の影響で急減したことなどがめだつた。

参加規程の一部修正 テレビジョン部門のうちテレビドキュメンタリーの参加作品については、前年度の規定では「光学または磁気録音つき十六ミリフィルムであること」を規制したが、ことしはこれを削除し自由とした。これは前年度は一定場所に作品を集めて審査するための必要から設けたものであり、ことしは作品の放送日時に、審査員が自宅で審査するよう改められたため、規制の必要がなくなったのである。また、レコード部門の国内盤に関する規定で、参加作品数の「各社五組以内」は変更がないが、その後に（組物は二組以内）とかつ書きが加えられた。これは近年の参加作品に大作の組物が多すぎるので、ひろく一般の購入しやすい一枚物の参加をふやしたための措置である。A規程(5)の(f)Ⅴ。次に、「合唱曲コンクリール」の参加については、これまでは芸術祭期間中に放送されるものに限定されていたが、昨年度芸術祭終了後から本年度芸術祭開始前までに放送されたものであっても、芸術祭期間中に再放送されるものは参加できるように改めた。A合唱曲規程ⅡⅤこれによって年間を通じてすぐれた作品がますます出ることを期待したものである。

八第二十一回芸術祭総覧抄録Ⅵ

ことしで芸術祭は二一年を迎えた。年ごとに拡大し年輪を重ねて来た芸術祭であるが、それだけに運営全般を通じて検討をせまられることもいくつかあった。参加公演数をとりあげても、ことしは過去の記録を大幅に上廻って、審査や事務処理の面で運営上の限界を知らされたこともその一つである。また、芸術祭を地方とより密着させ、「中央と地方とを結んだ芸術祭」の方向をさらに強化すべきではないかと痛感させられたこともその一つである。ことしの芸術祭の特徴らしいものとしては、祝典をはじめとして主催公演では、芸術祭の場で発表されたすぐれた作品をまとめて再鑑賞する意味あいの企画が比較的多く採り上げられたことであり、参加公演について言えば、前述のように総体に公演数が増えたことが目立ち、個々の公演・作品についてみても、質的水準がこれに並行して高くなっていることが認められた。

また、ことしから大衆芸能部門を一部と二部にわけ、この部門の参加がより適正に、より活発になることを期待したのも大きな改正点である。また、芸術祭公演のうち優秀な成果をあげたものに対し文部大臣から芸術祭賞（賞状と賞金十万円）または芸術祭奨励賞（賞状と賞金五万円）が贈られた。（前年まで賞金は五万円と二万円であって、本年より改正増額となった。）

主催公演 演劇部門で劇団雲の「ドン・ジューアン」東宝による「帝劇歌舞伎公演」（新作「平重衡」ほか新作・古典数種）松竹の「十一月大歌舞伎」（「妹背山」ほか数種）国立劇場の「開場歌舞伎公演」（「菅原伝授手習鑑」一部）の四公演をはじめとし、音楽部門では「語り物の系譜」と「日本歌曲の歴史」の二公演、舞踊部門で「芸術祭祝典・創作邦舞のゆうべ」、音楽部門では「芸術祭能」が、映画部門では恒例の「映画の歴史を見る会」と「芸術祭記録映画鑑賞会」の二公演、ラジオ・テレビ両部門では、NHKによる公募脚本の入選作放送、大衆芸能部門では「芸術祭寄席」が、民俗芸能部門では恒例の「全国民俗芸能大会」がそれぞれ実施された。また地方都市で開催する「地方主催公演」としては、昨年度からはじいた組織的な巡回公演を継承して、音楽と舞踊の地方巡回公演が採り上げられ、「中山博一独唱会」（四国および中国地区四か所）でシェーベルトの「冬の旅」ほかを演奏（および「法村・友井バレエ団」（東北地区四か所）でバレエ「タマール」ほかを上演）が行なわれた。このほか昭和三十三年度以降地方数か所で開催してきた「映画の歴史を見る会」（九州および近畿地区三か所）が実施された。

参加公演 参加総数は三〇二公演（前年度は二五七公演）に達し、前年度より急激にふえた。とくに音楽（公演によるもの）、舞踊・音楽・記録映画・レコードの各部門の増が顕著であった。またテレビ部門の参加数が前年なみを維持したのは、放送界の制作事情（とくに番組提供スポンサー会社の不況の影響）が一応安定への傾向を示したものとみられよう。

参加規程の一部修正 日本劇映画の参加規定は、これまでその年の九、十、十一月中に封切りされる新作に限られていたが、本年から外国映画の参加と同様に「九、十、十一月中にロードショーまたは一般封切りされるもの」という表現に改めた。A規程三の(2)の(f)Ⅴ、これは日本映画の興行形態に「特別上映制度」が採り入れられ、外国映画同様のロードショーを行なう傾向となった現状に対応したものである。またレコード部門の国内盤に関する規定では、組物が参加する場合「一組六枚を越えることはできない。」ことを新たに規制した。A規程三の(2)の(f)Ⅴ、これは近年組物が八枚から十六枚におよぶという大作本位の傾向がいちじるしく、販売価格も従って高価となって、ひろく一般に入手しがたい面が生じてきたためである。次に、既述のよう

に大衆芸能部門のなかを「一部」と「二部」にわけた。大衆芸能部門は、これまで落語、講談等のいわゆる「古い芸能」からショウ、ミュージカル等の「新しい芸能」にわたる、多くの分野を包含していたが、参加状況の活発化に伴う手続や審査上の便宜を考慮し、「一部」は落語、講談、漫才、浪曲、大衆演劇等を、「二部」はショウ、ポピュラー・ミュージック、ミュージカル等を取扱うよう改正した。A規程三の(4)Ⅴ。さらに申込受付期間(四期に区分)を、本年はそれぞれ十五日ずつ繰り上げるよう改めた。A規程四の(1)Ⅴ、これは参加事務処理の円滑化を期するためである。

八第二十二回芸術祭総覧抄録Ⅴ

ことしで芸術祭は二年を迎えた。年ごとに拡大し年輪を重ねて来た芸術祭であるが、それだけに運営全般にわたって常に再検討を怠ってはいないものであるが、本年度について言えば、参加公演数が累年増加の一途をたどり、審査等の運営面で限界にきたことが挙げられる。こうした点を考えて、ことしの芸術祭は運営面でもかなりの修正を試みた。その一つとして、各部門とも参加公演の承認をより厳重にし、厳選主義の原則を一層徹底させる方針を採った。これによって公演内容の質的低下をふせぎ、参加公演に対する信頼を高めようという趣旨である。この方針は次年度以降も引き続かれることになっている。次に本年度の主催公演の特徴について述べれば、その一つは伝統ある古典芸術の紹介公演が主軸をなしたことである。これは芸術祭期間中に行なわれる国立劇場の自主公演をすべて主催公演にとりあげることにしたためである。芸術祭創設の趣旨の一つが、わが国のすぐれた伝統芸術の模範的上演にあったことを想起するとき、古典の上演は今後とも創作と並行して芸術祭では大いにとりあげる必要がある。このためには、国立劇場と密接な関連をもちつつ、同劇場のもつ機能を芸術祭という場でじゅうぶん發揮してもらうのは当然のことと思われる。次に参加公演について言えば、前述のように厳選主義をたてまえとしたため、当然のことながら総伴に公演数が減少したことが目立った。

主催公演 東京を開催地とする「中央主催公演」としては、演劇部門で東宝「華岡青洲の妻」、松竹「十一月大歌舞伎」(「心中天網島」他古典数種)、日生劇場「若き獅子たちの伝説」、国立劇場の歌舞伎通し狂言の上演「彦山権現警助朗」(十月)および「桐一葉」(十一月)の五公演をはじめとし、音楽部門では「芸術祭祝典・創作邦楽のゆうべ」、国立劇場による「邦楽古典鑑賞会」および「声明公演」の三公演、舞踊部門で国立劇場による「文化文政の舞踊」と「舞臺」の二公演、能楽部門で「芸術祭

能」および「黒川能公演」の二公演、映画部門では恒例の「映画の歴史を見る会」と「芸術祭記録映画鑑賞会」の二公演、ラジオ・テレビ両部門では、NHKによる公募脚本の入選作放送、民俗芸能部門では、恒例の「全国民俗芸能大会」がそれぞれ実施された。

また地方都市で開催する「地方公演」としては、一昨年度からはじめた組織的な巡回公演を継続して、演劇と舞踊の地方巡回公演がとりあげられ、「劇団新人会公演」(東北地区四か所)、新劇「いのちある日」を上演。および「牧阿佐美バレエ団公演」(中部地区二か所、四国地区二か所)でバレエ「白鳥の湖」を上演。がそれぞれ行なわれた。このほか昭和三三年度以降、地方数か所で開かれてきた「映画の歴史を見る会」(九州および中部地区三か所)が実施された。

参加公演 参加総数は二七三公演(前年度は三〇三公演)で三〇公演も減少している。とくに演劇、音楽(公演によるもの)の両部門においては、参加申込作品の承認にあたり、特に厳選したため、本来なら前年を上回る公演数になるべきところ、大幅にふるい落された。このほか、記録映画、ラジオ、テレビ、レコードの各部門が減少した。それぞれ芸術祭向きの参加作品が少なかったこと、放送界にあっては番組提供者側、つまりスポンサーの姿勢が娯楽番組中心の視聴率安定路線から一歩も踏み出さずとしなかったことなどが、微妙にひびいている。

参加規程の一部修正 日本映画の参加規程は、参加本数の制定をこれまで各製作会社の年間製作本数「三十本」を基準とし、定められてきたが、本年から「二十五本」にこれを切り下げ、「二十五本以上製作の場合」は「三十本」を基準と改めた。A規程三の(2)の(4)Ⅴ、これは日本映画の製作本数が各社とも累年少なくなってきたこと、一例として東宝の場合、傍系の東京映画などを除いた自社作品が三十本を割ることになり、現行規程では、映画界の裏情にそぐわなくなってきたための改正である。

次にレコード部門の参加規程では、国内盤、外国盤の定義をより明確にするため表現を改めた。すなわち、これまでは国内で演奏・吹込みされたものが「国内盤」、国外で演奏・吹込みされたものが「外国盤」とされてきたが、これでは近時日本のレコード会社が海外で取材録音してきたものも「外国盤」の取り扱いを受けねばならなくなり、また逆に外国のレコード会社が日本において日本人の演奏家等により制作した場合「国内盤」ということになって、「国内盤」「外国盤」の呼称が内容とそぐわなくなるおそれが出てきたからである。そこで「国内盤」は「日本のレコード会社によって制作されたもの」、「外国盤」は「外国のレコード会社によって制作され、日本のレコード会社によって複製されたもの」とはっきり規定して、取り扱いの上でも疑義

がないようにした。また、これまで内規的な扱いとして参加を認めていない予約盤、限定盤、およびフオノ・シートについて、規定上はつきりその旨を表示した。△規程三の(5)の(イ)(ロ)△
さらに申込受付期間について、前年までは四期に区分されていたものを二期に区分し直し、それぞれ一か月繰り上げるよう改めた。△規程四の(1)の(イ)(ロ)△、ただし映画、ラジオ、テレビ、音楽(ラジオ放送によるもの)、レコードの各部門は、舞台実演による参加部門とは必ずしも歩調をそろえるわけにもゆかないので、若干の調整を施した。この受付期間の改正は、参加事務処理の円滑化を一層期するためである。

第二十三回芸術祭

△明治百年記念芸術祭△

この年の芸術祭は「明治百年記念芸術祭」の名のもとに開催された。昭和四十三年度が明治より数えて一〇〇年目にあたることから、政府は明治百年記念祝典をはじめ数多くの記念行事や記念事業を行なったが、芸術祭もそれら記念行事の一環として実施されることになった。このことはすでに四十一年度に内定されており、そのために四十二年予算においては既定経費に加えて「明治百年記念芸術祭のための脚本、楽曲等の作成委嘱に要する経費」として二八二万円が計上され、当該年度である四十三年度については、平年度の四倍以上にあたる四、七六五万六千円が特別に計上された。(芸術祭随想の安達健二「芸術祭の思い出」、三 参照)

このため例年のそれと比較するなら、いわば特別版の芸術祭となり、そこでこれまで予算の上で思うにまかせなかった主催公演の飛躍的な充実、強化がはかれるようになったのである。

またこの年、文化庁が発足し、長く文部省主管の芸術祭であったものが、文化庁主管となった。しかも初代長官にはこれまた、初代芸術課長で、芸術祭の生みの親でもある今日出海氏が再度民間から起用されたのである。

この年度の主催公演には、恒例の主催公演のほかに、明治百年記念特別公演として、演劇、オペラ、バレエの創作

公演、ならびに「アジア民族芸能祭」という国際色ゆたかな、大がかりな公演が実施された。これら記念特別公演の内容について述べておこう。

△演劇公演「三姉妹」▽

明治百年記念芸術祭にふさわしい演劇公演の実施について、芸術祭の執行委員会は前年度から協議が重ねられ、従来の商業演劇では採算上容易に上演し難い創作物の一本立ての公演を企画、上演劇場としては国立劇場を選んだ。またその内容として、明治百年を飾るにふさわしい新しい歌舞伎劇ということで、すでに「若き日の信長」「殺生関白」「平重衡」などを発表し、新作歌舞伎に実績をもつ、作家大仏次郎氏に脚本を委嘱することとなった。そして作者の希望から、同氏の原作に基いて一年間にわたりNHKから放送されたテレビドラマ「三姉妹」を舞台化することになったのである。

「三姉妹」は、幕末から維新にかけた日本の動乱期を背景とし、旗本の家に生まれた美しい三姉妹を中心に、主義主張を異にして対立する武家階級の人々を配し、それぞれの時代に処した生き方を描きわけたスケールの大きな歴史劇であり、明治百年記念にふさわしいものであった。演出には千田是也氏が当り、主な出演者に、松本幸四郎、市川猿之助、中村鴈治郎、市川中車、中村雀右衛門、沢村清四郎、岩井半四郎、中村又五郎の面々が出演した。すでにNHK大河ドラマとして放送され、茶の間になじみ深く、しかも国立劇場が新作ものを上演するという魅力も加わって、秋の演劇界に大きな話題を投げ、入場者数も同劇場のそれまでの記録を破る成績を示すものとなった。

△オペラ・バレエ公演▽

オペラにおいても、創作オペラに主眼をおいて検討された結果、これまでにすぐれた劇音楽の作品を数多く作曲してきた石井欽氏が、数年来あためてきた「平家物語」による作品があることを知り、これをとりあげることとなった。石井欽原案・作曲、山内泰雄台本の歌劇「袈裟と盛遠」（三幕六景）が上演の運びとなったのである。上演にあたっては、二期会、藤原歌劇団が出演協力し、また若杉弘指揮の読売日本交響楽団の演奏で、東京文化会館において、芸術祭ならではの豪華な組合せが実現し、話題を呼んだ。

また、バレエでは、作家三島由紀夫氏をはじめて書きおろした台本で、「ミランダ」（二幕七場）を戸田邦雄が作曲、橋秋子が演出振付し、バレエ界の総力をあげて完成させた。渡辺暁雄指揮による東京フィルハーモニー交響楽団の演奏により、日生劇場と東京文化会館の二か所で公演された。

この作品はサーカスの花形ミランダと魚河岸の若者との悲恋物語に、欧化主義と日本主義の対立と融合という明治の課題を織りまぜて表現したもので、築地の海軍が原を舞台にした曲馬団員の華やかな群舞や、河岸の若者たちの力強い群舞など随所におこみ、明治百年記念にふさわしい舞台を展開した。

このオペラとバレエはそのまま地方主催公演として、オペラは近畿地方五ヶ所を選び、バレエは近畿九州地区など六ヶ所を選んで地方公演が行われた。

地方に中央のすぐれた芸術団体を派遣し、優秀な芸術祭主催公演をひろく全国的規模で開催する計画がはじめられてから、五年目を迎えるに到ったが、前年度までは演劇、音楽、舞踊などのうち二団体、公演会場もおおよそ八か所となっていたが、この年は明治百年記念でもあることから、演劇五か所、オペラ五か所、バレエ六か所、計十六か所において地方公演を行なうことができた。

△アジア民族芸能祭▽

芸術祭の特別公演の中でも最大の、また中核をなす行事として、その終幕を飾ったこの公演は、NHK、日本青年

館との共催、外務省後援で、十一月二十八日、二十九日、三十日、国立劇場において入場無料で公催された。

芸能の宝庫ともいわれるアジア各国から、その代表的芸能団体を呼んで身近かに鑑賞、研究したいというのは、関係各界の多年の要望でもあったが、これを明治百年記念芸術祭として実現し得たのは、日本の芸能史上画期的ともいえる出来事であるとともに、それは芸術文化を通じて、アジア各国の親善交歓を促進する意味でも、注目すべき公演といえよう。

来日した参加団体は、インド・ダルバナ舞踊団（十三名）、インドネシア・ガメラ音楽舞踊団（二十一名）、タイ・タイ王立舞踊団（二十五名）、中華民国・中国国劇団（四十二名）、フィリピン・バヤニハン・フィリピン舞踊団（四十名）の五団体で、これに日本の岩手、秋田、富山、広島、宮崎各県の民俗芸能団体と、坂東三津五郎、市村竹之丞による歌舞伎舞踊「舌出し三番叟」が加わり、アジアのバラエティに富んだ芸能を披露し、圧倒的な好評を受けた。これらはいずれも、NHKの総合および教育テレビから全国放送され、ひろく国民一般の鑑賞にも供されるものとなった。

このような行事はぜひ毎年開いてほしいという要望も強く、また出演団体の中からも、アジア各国まわり持ちで開くべきだという声も聞かれたのであるが、各国各様の国内事情もあり、こうした国際間にまたがる芸能行事を短期日にまとめあげることは並大抵のことではなく、本会においては、特に折衝契約関係を一手に引き受けた日本放送協会の尽力に負うところ大であった。

だがこうした第一歩があつてこそ、後に述べる第三十回芸術祭において、さらにその規模、内容を充実させた企画で「アジア民族芸能祭」が開かれることになるのである。

なおこの年度国立劇場で開かれた、十月歌舞伎「天衣紛上野初花」、人形浄瑠璃文楽、女流邦楽鑑賞会、舞楽公演、声明公演、舞の会、日本の民俗劇と人形芝居の系譜、といったものが国立劇場と共催の形で主催公演となっている。

△第二十三回芸術祭総覧抄録▽

ことしの芸術祭は「明治百年記念芸術祭」の名のもとに開催された。本年度で明治より数えて一〇〇年目にあたることから、政府は明治百年記念祝典をはじめ数多くの記念行事や記念事業を行なったが、芸術祭もそれら記念行事の一環として実施されたからである。このことは既に昭和四一年度に内定されており、そのため四二年度予算においては既定経費に加えて「明治百年記念芸術祭のための脚本・楽曲等の作成委託に要する経費」二八二万円が計上され、当該年度である四三年度については平年度の四倍以上にあたる四、七六五万六千円が特別に計上された。

かくしてことしの芸術祭は、明治百年記念の芸術祭という、例年のそれと比較するならば特別版の芸術祭となった。そうして、明治百年を記念することの意義を、芸術祭の場合においては、主催公演の飛躍的な充実・強化をはかり、ひろく一般にすぐれた芸術を提供するという芸術祭はんらいの趣旨に添うことに求めることとなった。具体的には、次項に述べるように、恒例の主催公演のほかに、明治百年記念特別公演として演劇、オペラおよびバレエの創作公演ならびに「アジア民族芸能祭」という国際色を帯びた大がかりな公演を実施したことであり、従来の主催公演が予算の乏しさから必ずしも芸術祭の祭典としての実をそなえていなかったことを反省し、芸術祭の画期的な充実・強化を図ることであった。

主催公演 前述の「特別公演」を含む一八種の「中央公演」と四種の「地方公演」（全国一九か所）が実施された。「特別公演」は演劇「三姉妹」（国立劇場）、オペラ「契機と盛運」（東京文化会館）、バレエ「ミランダ」（日生劇場・東京文化会館）および「アジア民族芸能祭」（国立劇場）であるが、うち演劇、オペラおよびバレエの三種目はいずれも前年度に国が台本・作曲等の創作を委嘱して得られた新作の舞台化であり、また「アジア民族芸能祭」はかねて関係各界から多年待望されていたアジア各地の芸能の一大展示であった。

このほか恒例の主催公演として国立劇場の十月歌舞伎公演「天衣紛上野初花」、文楽公演「加賀見山田錦絵ほか」、邦楽公演「女流邦楽特別鑑賞会」、雅楽公演「舞楽」、「声明」、「舞の会」、民俗芸能公演「からくり人形戯の系譜」の七公演をはじめ、芸術祭祝典をかねた「邦楽・邦舞のゆうべ」（国立劇場）、「芸術祭能」（水道橋能楽堂）、「映画の歴史を見る会」（ヤマハホール）、「芸術祭記録映画鑑賞会」（ヤマハホール）、「映画芸術劇場」（虎ノ門ホール）、別にラジオドラマ公募脚本入選作品「めぐりあい」および同テレビ作品「れん（恋）」の放送（NHK）を行なった。

「地方公演」としては、「特別公演」として新劇「榎本武揚」(劇団雲)を東北地区五箇所、オペラ「袈裟と盛遠」(二期会・藤原歌劇団)を近畿地区五か所、バレエ「ミラング」(バレエ各団体合同出演)を近畿・九州地区五か所に、また恒例の「映画の歴史を見る会」を四国・近畿地区四か所に巡回公演した。

参加公演 参加総数は二三五公演(前年度は二七三公演)で三八公演の減少であったが、各部門とも、内容は充実したものがあつた。

参加規程の一部修正 テレビジョン部門に関する参加規程のうち、テレビドキュメンタリー参加作品の放送時間を、これまでは「二十分以上六十分以内」のものと定めてきたが、本年から「二十分以上」のものと改め六十分以上の作品も参加できることとした。△規程三の(4)▽、これは最近、中央・地方とも各放送局が一時間以上の長編ドキュメンタリー作品を制作・放送する傾向になってきたので、この際、ドラマと同様に放送時間の制限を廃止したものである。

第二十四回芸術祭

△芸術祭の再検討▽

芸術祭は昭和二十一年から回を関すること二十四回、四半世紀を迎えることとなった。その間、無予算の時代から出発して、やがてオリンピック東京大会を迎え、明治百年記念を経て、国の芸術行事として、芸術文化の振興と普及に少なからず寄与してきたが、ややもすれば、役所の横行性からマンネリズムにおちいつてはいないか、かならずしも所期の目的を満足に果しているとはいえない面があるのではないか、という批判も聞かれていた。

このため文化庁では、旧文部省文化局の当時から明年以降の芸術祭のあり方について検討をくわえ、是正すべき点があればこの際改め、大いに刷新充実することが必要だと考えて、五月、六月の間五回にわたり、「芸術祭懇談会」を開き、全般的な問題と各分野の問題について関係方面の識者に忌憚のない意見を求めることになった。

その結果、明年以降の芸術祭の改正方針として概ね次のようなことが定められた。

「芸術祭のフェスティバル的性格を強く打ち出し、芸術の祭典としての盛り上りを図ることを基本とする。

(i) すぐれた芸術をひろく一般に提供しようとする主催公演本来の趣旨にかんがみ、これを一定の期間、集中的に連続して開催し、その飛躍的な充実、強化を図る。

(ロ) 右の主催公演は、中央のみならず地方においても拡充、強化を図る。

(ハ) 芸術祭を多彩かつ豊富ならしめるため、新たに協賛公演を設け、すぐれた実績を持つ芸術家(団体)の公演を促進する。

(ニ) 参加公演は実演芸術とし、芸術家の創作、発表意欲を高める場として存置し、期間を短縮して実施する。

(ホ) 映画、放送、レコードについては従来の参加公演の範疇から分離して「映画、放送、レコードの参加」として取扱う。

(ヘ) 芸術祭に対する内外の関心を盛り上げるため、広報宣伝の充実強化を図るとともに、各方面に対し、芸術祭への積極的な参加を要請する。」

以上の改正方針を基本とし、改正点として開催期間を十月一日から十一月十五日までの一か月半にちぢめ、特に主催公演は、主として十月の前半に集中して行なうことにした。また主催公演以外に協賛公演制度をもうけ、国がその公演経費の一部を支出するようにした。さらに授賞は参加公演(映画、放送、レコードの作品を含む)のみを対象とし、従来の「芸術祭賞」「芸術祭奨励賞」の名称をそれぞれ「芸術祭大賞」「芸術祭優秀賞」とした。さらに毎年二ないし三種目の主催公演のため、楽曲ないし脚本の委嘱ないし一般公募を行なうことにした。

こうした背景のもとに四十四年度の予算額は、従来の一、一〇〇万円にくらべ、主催公演経費の充実ほか協賛公演の新設、創作委嘱費の計上という改正点を含み三、六九二万円が認められた。

△改正による芸術祭公演▽

芸術祭への再検討から改正方針、改正点が導かれ、それにもとづいての第二十四回芸術祭は、全体としては従来の絶花的傾向に、一つの枠を設け、一応まとまりをつけた恰好になった。

主催公演として、音楽部門では祝典を兼ねた「交響楽のゆうべ」を前年度芸術祭賞を受けた読売日本交響楽団の出演で行なったほか、同じく芸術祭賞の厳本真理弦楽四重奏団の室内楽演奏会、日本合唱協会による第二回目的「芸術祭受賞合唱作品のゆうべ」(第一回は四十四年度実施)、および三曲界の名手を動員して行われた「芸術祭三曲公演」、舞踊では大家、中堅の出演による「邦舞公演」、芸術祭で受賞した中堅をそろえての「現代舞踊公演」および「バレエ公演」のほか「芸能バリエテ69」、「芸術祭能」、「映画の歴史を見る会」、「芸術祭参加映画特別披露鑑賞会」、「芸術祭参加記録映画鑑賞会」、「映画芸術劇場」などが行なわれた。

地方公演としては、劇団四季による新劇、ドストエフスキーの「白痴」を、鹿児島市など八都市で、二期会のオペラ、モーツアルトの「魔笛」を新潟市など五市で、日本舞踊協会の中堅以上をすぐった「邦楽、邦舞公演」を旭川市など五都市で、また「映画の歴史を見る会」を福岡市、高知市で開催した。

この年からはじめられた協賛公演は、芸術祭主催公演以外にもこの時期には多くのすぐれた公演が行なわれているので、そのうちすぐれたものを芸術祭の一環として公演してもらおうというもので、協賛公演には文化庁が公演経費の一部を支出するものである。

従来、芸術祭執行委員会が完全に企画、実行する主催公演もあれば、名目的に共催するものもあったのが、協賛公演によって、両者をはっきりと区別されるようになった。

この年の協賛公演としては「武原はん秋の会」、国立劇場十一月歌舞伎公演「椿説弓張月」等十一公演が選ばれた。参加公演は一九七公演で、前年度より三八公演減少しているが、これは参加期間の短縮が影響しているから止むをえない現象といえよう。

因にこの年から、ラジオ、テレビの芸術祭脚本募集とその放送は行なわれなくなった。

△授賞について▽

この年から授賞の名称が、従来の芸術祭賞、芸術祭奨励賞が、芸術祭大賞（賞状・賞牌と賞金十万円）、芸術祭優秀賞（同、賞金五万円）に改称された。第二十四回の授賞は、芸術祭大賞七件、芸術祭優秀賞五九件である。少しさかのぼって授賞数をみると別表のようになる。

年度	参加数	授賞数		合計
		芸術祭大賞 (芸術祭賞)	芸術祭優秀賞 (芸術祭奨励賞)	
41年	三〇二件	一一件	六六件	七七件
42年	二七三件	一〇件	六二件	七二件
43年	一三五件	一四件	五四件	六八件
44年	一九七件	七件	五九件	六六件

この年度新装の芸術祭賞牌額ができ、副賞として、大賞十万円、優秀賞五万円の賞金が贈られた。なお賞金額は、第二十九回芸術祭から、芸術祭大賞は賞金二十万円、芸術祭優秀賞は賞金十万円となり、さらに第三十回芸術祭では賞金額が三十万円と十五万円となるのである。

△第二十四回芸術祭総覧抄録▽

前年度の芸術祭は、政府の明治百年記念行事の一環として行なわれた特別版の芸術祭であり、予算も四、七六五万六千円が計上され例年より豪華な内容を組むことができたが、ことしの芸術祭も余勢をかってこれに劣らぬ充実した内容のものとなった。その経緯をさかのぼれば、旧文化局の当時から、芸術祭のあり方について全面的な検討をはじめたことに端を発するのであるが、以下簡略を期するため、昭和四三年九月二三日の新聞発表資料にゆずることにする。

明年度以降の芸術祭の改正について（新聞発表）

芸術祭は昭和二十一年以降今日まで毎年開催され、国の芸術行事として芸術文化の振興と普及に寄与してきたが、すでに創始後二十余年を経過し、この間、マンネリズムにおちいつていたのではないか、かならずしも所期の目的を果していないのではないか、という批判の声も一部に聞かれるようになった。このため、文化庁では、旧文化局の当時から明年度以降の芸術祭のあり方について検討をくわえ、是正すべき点があれば是正し、この際、大いに刷新充実することが必要であると考え、去る五月二三日を第一回として、六月一日、五日、六日、七日、と都合五回にわたり芸術祭懇談会を開き、全般的な問題と各分野別の問題について関係各方面の識者に忌憚のない意見を求めた。

第一回懇談会出席者（五月二三日）

—全般について—

安藤磯（日本蓄音機レコード協会展長）、池谷作太郎（日本舞踊協会事務局長）、内村直也（劇作家）、浦松佐美太郎（評論家）、江口博（舞踊評論家）、大林清（放送作家）、観世元正（能楽協合理事長）、酒井三郎（日本民間放送連盟専務理事）、佐野政雄（東京都教育委員会社会部長）、渋谷秀雄（評論家）、菅原卓（演出家）、高橋博（芸能評論家）、田辺秀雄（音楽評論家）、対馬好武（教育映画製作者連盟理事長）、寺中作雄（国立劇場理事長）、戸板康二（作家、演劇評論家）、遠山一行（音楽評論家）、永山雅啓（松竹株式会社常務取締役）、花柳寿楽（舞踊家）、坂東三津五郎（日本舞踊協会常任理事）、村松道弥（舞踊評論家）、山田五郎（全日本芸術舞踊協会副会長）、鈴木進（日本映画製作者連盟事務局長）、丹羽正明（音楽評論家）、利倉幸一（演劇評論家）

第二回懇談会出席者（六月一日）

—演劇・大衆芸能を中心として—

石沢秀二（演劇評論家）、杉山誠（演劇評論家）、竹越和夫（演劇評論家）、菊地清寿（東宝株式会社演劇部長）、倉林誠一郎（新劇団協議会代表）、中屋健次（松竹株式会社演劇部次長）、羽田義明（日本演劇協会事務局長）、森喜六（国立劇場事業部長）、今井欣三郎（能楽評論家）、大河内俊輝（能楽評論家）、観正元正（能楽協合理事長）、榎本滋民（劇作家）、高橋博（芸能評論家）、南部圭之助（映画・芸能評論家）、野口久光（音楽評論家）

第三回懇談会出席者（六月五日）

—音楽・舞踊を中心として—

大木正興（音楽評論家）、柴田知常（音楽評論家）、田辺秀雄（音楽評論家）、長尾一雄（音楽評論家）、宮沢純一（音楽評論家）、坂本朝一（日本放送協会放送総局副局長）、杉山一男（日本民間放送連盟事務局長）、江口博（舞踊評論家）、景安正夫（舞踊評論家）、橋秋子（舞踊家）、花柳寿楽（舞踊家）、村松道弥（舞踊評論家）、池谷作太郎（日本舞踊協会事務局長）、関口長世（日本バレエ協会事務局長）、山田五郎（全日本芸術舞踊協会副会長）

第四回懇談会出席者（六月六日）

—映画・レコードを中心として—

池田義信（映倫常任委員）、萩昌弘（映画評論家）、清水俊二（映画評論家）、登川直樹（映画評論家）、双葉十三郎（映画評論家）、阿部慎一（教育映画製作者連盟事務局長）、鈴木進（日本映画製作者連盟事務局長）、大木正興（音楽評論家）、田辺秀雄（音楽評論家）、宮沢純一（音楽評論家）、安藤鶴夫（日本蓄音機レコード協会会長）

第五回懇談会出席者（六月七日）

—ラジオ・テレビを中心として—

相島敏夫（放送評論家）、植草圭之助（放送作家、内村直也（劇作家）、浦松佐美太郎（評論家）、大木豊（放送評論家）、菅原卓（演出家）、南江治郎（放送評論家）、坂本朝一（日本放送協会放送総局副局長）、杉山一男（日本民間放送連盟事務局長）さらに、文化庁ではこれらの意見を具体的な改正方針にまとめあげるため、左記の委員よりなる企画委員会をもうけた。この企画委員会では八月二四日、同三一日の二回にわたり従来懇談会における意見、提案等を中心として慎重に審議を重ねた結果、別紙の成案を得、その実現を強く要請したものである。

企画委員会委員

藍原英了（舞踊評論家）、安藤鶴夫（演劇評論家）、安藤鶴（日本蓄音機レコード協会会長）、池田義信（映倫常任委員）、江口博（舞踊評論家）、景安正夫（舞踊評論家）、観世元正（能楽協会理事長）、酒井三郎（日本民間放送連盟専務理事）、杉山誠（演劇

評論家）、田辺秀雄（音楽評論家）、寺中作雄（国立劇場理事長）、戸板康二（演劇評論家）、利倉幸一（演劇評論家）、中山卯郎（日本放送協会芸能局長）、宮沢純一（音楽評論家）

明年度以降の芸術祭の改正方針

1 改正の基本方針

芸術祭のフェスティバル的性格を強く打ち出し、芸術の祭典としての盛り上がりを図ることを基本とする。
イ すぐれた芸術をひろく一般に提供しようとする主催公演本来の趣旨にかんがみ、これを一定の期間、集中的に連続して開催し、その飛躍的な充実、強化を図る。

ロ 右の主催公演は、中央のみならず地方においても拡充・強化を図る。

ハ 芸術祭を多彩かつ豊富ならしめるため、新たに協賛公演を設け、すぐれた実績を持つ芸術家（団体）の公演を促進する。

ニ 参加公演は実演芸術とし、芸術家の創作・発表意欲を高める場として存置し、期間を短縮して実施する。

ホ 映画、放送、レコードについては従来参加公演の範ちゅうから分離して「映画、放送、レコードの参加」として取扱う。

ヘ 芸術祭に対する内外の関心を盛り上げるため、広報宣伝の充実強化を図るとともに、各方面に対し、芸術祭への積極的な参加を要請する。

2 改正点

イ 開催期間

(1) 芸術祭の期間は、現行の二か月間を改め、十月一日から十一月十五日までの一か月半とする。

(2) 主催公演 中央においては、主として月の前半に集中して行ない、地方においては、地方芸術祭の期間中に行なう。

(3) 協賛公演 芸術祭の全期間。

(4) 参加公演 十月十六日から十一月十五日までの一か月間。

(5) 映画、放送、レコードの参加 芸術祭の全期間。

ロ 開催地

従来どおり、東京を中心として行なうが、主催公演の地方巡回を拡充・強化するため、地方都市における開催箇所の増加

を図る。

ハ 主催公演

(1) 演劇、音楽、舞踊、映画、大衆芸能の各部門については、原則として、毎年主催公演を行なうこととし、主として月前半に集中して開催する。

(種目) 歌舞伎、文楽、新劇、能楽、オペラ、バレエ、洋楽、邦楽、邦舞、モダンダンス、映画、落語、講談等。

(会場) 国立劇場、東京文化会館、虎ノ門ホール、能楽堂、都内の大小ホール。

(2) 地方公演は、右の中央公演のうち数種目を地方都市に巡回公演する。

(3) 主催公演は執行委員会が企画した公演に限ることとする。

(4) 国は、主催公演のうち、無料とするものについてはその公演経費の全額を、有料とするものについてはその公演の財政的保障を確保するためその一部を、それぞれ支出するものとする。

(5) 文化庁は、毎年二ないし三種目の主催公演のため、楽曲、脚本等の委嘱ないしは一般公募を行なうものとする。

ニ 協賛公演

(1) 協賛公演は原則として、実演芸術を対象とし、日本芸術院賞、芸術選奨文部大臣賞、芸術祭賞の受賞者その他すぐれた実績をもつ芸術家(団体)の公演とする。

(2) 協賛公演に対しては、国は公演経費の一部を支出する。

ホ 参加公演

(1) 参加公演は芸術祭に参加を希望するものの中から、その部門の審査委員会の意見に基づき、執行委員会の委員長が芸術祭参加を適当と認めた公演とする。

(2) 従来、音楽部門の別わくとして実施してきたラジオ放送による参加の「合唱曲コンクール」は廃止する。

ヘ 授賞

授賞は、「参加公演」および「映画、放送、レコードの参加」のみ対象とすることとし、現行の「芸術祭賞」および「芸術祭奨励賞」の名称をたとえば「芸術祭賞」および「芸術祭優秀賞」とする。

なお、「映画、放送、レコードの参加」の授賞方法については、別途検討するものとする。

以上の背景のもとに、文化庁は四四年度予算編成にあたり、芸術祭経費七、七〇〇万円を要求してその刷新充実を期した。その結果、四四年度では三、六九二万円が計上されたが、これは平年度の予算規模の一、一〇〇万円に比べ、主催公演経費充実は協賛公演の新設、創作委嘱費の計上という注目すべき改正を含み、芸術祭を一段と前進させるものであった。

事務局ではこの予算の内示を受けるや、すぐ「明年度以降の芸術祭の改正方針」に基づく「芸術祭開催要綱」および「四四年度芸術祭参加規程」の改正案をまとめ、四四年度三月二五日関係各界の識者二六名に呼びかけて芸術祭企画懇談会を開き、その賛同を得て改正原案を確定した。この原案は六月十日の芸術祭執行委員会第一回総会でも異議なく了承され、別掲の「芸術祭開催要綱」と参加規程になったものである。

協賛公演 協賛公演が設けられた趣旨は、芸術祭公演以外にもこの時期には多くのすぐれた公演が行なわれているので、そのうち特にすぐれたものは芸術祭の一環として公演してもらい、ひろく一般に紹介しようとするところにある。協賛公演に指定する公演の選択は、当然のことであるが、執行委員会の当該部門の企画委員会が行ない、協賛公演には文化庁が公演経費の一部が支出される。

参加公演 参加総数は一九七公演で三八公演減少した。これは参加期間の短縮が影響していることは明らかで、改正の初年度としてある程度やむを得ないことであった。なお、これまでは、主催公演の中でも演劇公演における個人の演技、演出等は審査対象になったが、本年度から参加公演のみを対象とすることに運用を改めた。

開催要綱および参加規程の改正 開催要綱においては、(1)開催期間を短縮する、(2)主催公演の期間と参加公演の期間を区別する、(3)協賛公演を加える、(4)実演芸術の参加期間と映画、ラジオ、テレビ等の作品参加の期間を区別する、(5)賞の名称を芸術祭大賞と優秀賞に改める等の改正を行なった。なお、部門の配列を改めて実演芸術をまず並べるとともに、音楽部門から放送による音楽と合唱曲とをラジオ部門に移し、ラジオドラマの部、音楽の部、合唱曲の部とした。参加規程では、実演芸術の各部門の参加は公演単位を原則にしたこと、参加申込期間を半月くり上げたこと、ラジオのはか映画およびテレビも東京で上映または放送されない作品でも参加できる道をひらいたことなどが主要な改正点である。

第二十五回～二十九回芸術祭

△主催公演の刷新充実化▽

芸術祭の総合的刷新をはかるため、第二十四回芸術祭において、開催要綱の大幅な改正を行って以来、主催公演を十月前半に主として集中させるようにしたこと、芸術祭のフェスティバル的性格が強く打ち出され、集中効果が発揮されるようになった。

またこれも改正点の中で挙げられた、「文化庁は毎年二ないし三種目の主催公演のための楽曲、脚本等の委嘱ないしは一般公募を行うものとする」という趣旨が生かされ、すぐれた委嘱作品の発表をみることができるようになった。各年度における特色ある主催公演を眺めてみよう。

第二十五回芸術祭では、歌舞伎、オペラ、バレエの創作物の大作をそろえたことが大きな特色といえる。前年度予算において、はじめて創作委嘱費が計上されたが、これがこの年度に上演された新作歌舞伎、創作オペラに充てられたわけである。舟橋聖一氏に委嘱した新作歌舞伎「関白殿下秀吉」、清水脩作曲、岡本一彦台本による創作オペラ「大仏開眼」がそれである。

このほか横井茂氏に構成・振付を委嘱した創作バレエ「ロミオとジュリエット」があり、さらには「雅楽のよう

べ」、日本楽器の可能性を求める邦楽4人の会と日本音楽集団の活動を紹介する「現代音楽のようべ」、日本プロ合唱連合による「コーラスフェスティバル」、中世の男女の愛の諸相をテーマに番組を組んだ「芸術祭能」、恒例ともなった映画の「映画の歴史を見る会」「映画芸術劇場」「芸術祭参加記録映画鑑賞会」の三公演などが行われた。

第二十六回も委嘱作品に重点が置かれ、祝典の際の合唱曲をはじめ、交響楽、邦舞、洋舞の各公演で、計七本の委嘱作品が発表された。二十七回も同様にバレエ、オペラ等三公演において計六本の委嘱作品が、第二十八回も数多くの委嘱作品に加え、海外で活躍する邦人芸術家の招聘をはかったりした。第二十九回芸術祭では、音楽部門で新進の作曲家池辺晋一郎氏に、演劇で人形浄瑠璃文楽座の鶴沢燕三氏にそれぞれ作曲を委嘱したほか、メゾ・ソプラノ歌手西内令氏に一時帰国してもらい、室内オペラへの出演を依頼するなどあり、また、前年度大衆芸能部門で好評を博した「寄席忠臣蔵」に対し、この年はポピュラーミュージックの世界を主題にして特別企画をもつなどがあった。

△協賛・参加公演▽

協賛公演は第二十五回が七種で、吾妻徳穂「恋三趣」の邦舞公演をはじめ、第七回国家指定芸能特別鑑賞会、声明公演等。第二十六回が十二種、第二十七回が九種、第二十八回が八種、第二十九回が九種と、主として国立劇場自主公演を中心に選定委嘱された。

参加公演は前にも述べたように、期間の短縮にともない、参加本数が第二十四回以後減少したが、その後徐々に増加し参加意欲の高まりをみせた。

因みに数字であげると、第二十四回Ⅱ一九七、第二十五回Ⅱ一九七、第二十六回Ⅱ一九六、第二十七回Ⅱ一六三、第二十八回Ⅱ一九八、第二十九回Ⅱ二一四となっている。

参加も次第に新進気鋭のグループとキャリアに富む人たちの組によって覇が競われるようになり、内容的には一層

充実してきた感がある。またラジオ・テレビ部門は、民放東京キー局の参加意欲が乏しくなり、参加数も減少したが、むしろそれをおぎなうて、地方局の参加熱意が高まり、高い水準の優れた作品が発表されるようになった。またこの期間、外国映画の参加が多くなり、また舞台関係では関西そのほかからの上京参加公演もあって気を吐いた。

△移動芸術祭▽

すでに明治百年記念芸術祭を契機にして芸術祭主催公演は著しく改善されたが、それは主に中央公演であって、地方公演については予算上三種目各五箇所程度が保証されているにすぎなかった。中央のすぐれた舞台芸術に接する機会に恵まれない地方各地にこそ、すすんで鑑賞の機会を提供すべきであるという意見がたかまり、事務局としては「移動芸術祭」の名のもとに広く全国的にすぐれた舞台芸術を巡回公演し、全国で、東京と同規模の芸術祭が開かれるようにする構想を立て、四十六年度予算編成に際し、約一億円を要求していたが、四十五年十二月十一日に開催された芸術祭執行委員会の総会で、この案が紹介されるや、全員一致でその実現方を関係当局に要望する決議がなされた。そして「移動芸術祭」の実現方についての要望書が、芸術祭執行委員会委員長の名で起草され、即日文部省、大蔵省幹部に提出された。その結果、四十六年度予算として八、五〇〇万円が計上され、画期的なこの事業がその第一歩を踏み出したのである。

そして昭和四十六年度から、長年念願としていた「移動芸術祭」が開幕した。これは全国四か所（昭和四十六年度は埼玉、兵庫、岡山、福岡の各県）を移動芸術祭開催県に指定し、中央から派遣するすぐれた舞台芸術の公演をそこで集中開催するとともに、その機会を利用して派遣舞台芸術の巡回公演を全国的に行い、地方における芸術鑑賞の機運を醸成しようというものであった。

八、五〇〇万円の予算によって六種目の公演が全国三十県にわたる広範な諸都市で開催された。その内訳は文楽七

都市（公演回数十四回）、歌舞伎十七都市（三三回）、新劇十六都市（十六回）、交響楽十一都市（十一回）、オペラ十都市（十回）、バレエ十一都市（十一回）合計七一都市延九四回の公演となっている。こうしてこれまで芸術祭が毎年行ってきた主催公演の地方巡回事業は、以後「移動芸術祭」によって肩代りされたわけである。

△第二十五回芸術祭総覧抄録▽

芸術祭祝典に際し、高橋誠一郎委員長が「戦後荒廃のさなかに創始された芸術祭がすでに四半世紀の道程を経たことを思うとき、まことに感慨なきを得ません」云々とあいさつされたのは印象的であった。その第二十五回芸術祭の内容は以下に述べるとおりであり、前年に引き続き相当の成果をあげることができたが、今後の問題として、いかにして地方公演をより拡充するかということが課題となった。明治百年記念芸術祭を契機にして芸術祭主催公演は著しく改善されてきたが、それは中央公演についてであり、地方公演については予算上三種目各五箇所程度が保証されているにすぎない。このため、中央のすぐれた舞台芸術に接する機会にほとんど恵まれていない地方各地にこそ、すすんで鑑賞の機会を提供すべきであるという意見が高まってきた。これは単に芸術祭という行事を離れて考えてみても、ほんらい芸術行政として当然手をつけるべき分野であった。従って事務局としては、「移動芸術祭」の名のもとに広く全国的にすぐれた舞台芸術を巡回公演し、東西数箇所でも東京と同規模と芸術祭が開かれるようにする構想を立て、四十六年度予算編成に際し約一億円を要求していたが、四十五年十二月十一日に開催された執行委員会第二回総会でこの案が紹介されるや、全会一致でその実現方を関係当局に要望することが決議された。

「移動芸術祭」の実現方について（要望）

芸術祭が、国の主催する芸術の一大総合行事として、昭和二十一年以来毎年開催され、芸術家に対してはその創造精神を鼓舞し、ひろく一般に対してはすぐれた芸術を鑑賞する良き機会を提供し、わが国芸術文化の向上と普及に果たしてきた功績は多大なものがあります。

とくに中央公演が近年とみに充実をみたことは、芸術祭に関係する者として喜びにたえません。しかしながら、地方公演については毎年数少ない作品を数都市に巡回公演する程度にすぎず、芸術祭の恩恵は全国に及んでいない

は言えません。

一方、ほとんどの地方の現状をみるに、歌舞伎、文楽、能楽、邦楽等の伝統芸術についても、また演劇、文楽、オペラ、バレエ等の現代芸術についても、すぐれた公演に接する機会は無にもひとしく、国民全体からみれば、その大多数が香り高い芸術文化とは無縁とも言えるような状態に置かれております。このような状況を考えると、すべての国民がすぐれた芸術文化を身近に享受できるようにすることこそ、一団の文化の調和ある発展を願う者のひとしく期待するところであります。

文化庁で構想されている「移動芸術祭」の企画は、このかねての期待にこたえるものとして、われわれ芸術祭関係者をはじめ芸術に携る者のすべてがそのすみやかな実現を念願しているところであります。どうか現在東京を中心に行なわれている芸術祭と同等規模以上の芸術の祭典を全国的にくりひろげ、もって国の全境、全階層にわたり芸術文化が花ひらく素地を培われるよう切に希望いたします。

以上、本日開催の芸術祭執行委員会第二回総会の決議に基づき要望いたします。

昭和四五年十二月十一日

芸術祭執行委員長 高橋 誠 一 郎

この要望書は委員長ほか数名の委員を代表して即日文部省、大蔵省の幹部に提出された。(この「移動芸術祭」の新規予算要求は芸術界からも強い支持があり、四六年度予算に八、五〇〇万円が計上され、画期的なこの事業がその第一歩を踏み出した。)

主催公演 中央公演としては、歌舞伎、オペラ、バレエの創作物の大作をそろえたことが本年度の一大特色である。前年度予算においてはじめて創作委嘱費が計上されたが、これらは本年度に上演する新作歌舞伎、創作オペラに充てられたのである。すなわち、舟橋聖一氏に委嘱した脚本による新作歌舞伎「関白秀吉」および清水箝氏作曲・岡本一彦氏台本による創作オペラ「大仏開眼」がそれである。このほか、本年度において横井茂氏に構成・振付を委嘱したものが創作バレエ「ロミオとジュリエット」で、これら創作公演はいずれも高い世評を受けることができた。このほか祝典を兼ねて「雅楽のゆうべ」(宮内庁楽部)、日本楽器の可能性を求める新しい日本音楽の創作活動につとめている邦楽「4人の会」と日本音楽集団の活動を紹介する「現代日本音

楽のゆうべ」、創立もない日本プロ合唱団連合による「コーラス・フェスティバル」、中世における男女の愛の諸相をテーマに番組を組んだ「芸術祭能」三夜、映画の三公演「映画の歴史を見る会」、「映画芸術劇場」(文芸映画)二夜、「芸術祭参加記録映画鑑賞会」と、それぞれに企画性ある公演を開催した。地方公演としては、中央と同じものを各都市にも廻すという意味で、前掲の「大仏開眼」を福岡市など十都市で、「ロミオとジュリエット」を札幌市など八都市で、また恒例の「映画の歴史を見る会」を北九州市など三都市で開催した。創作物のオペラ、バレエの大作がオーケストラ編成で各地を巡演したことは芸術祭の歴史のうえでも稀有なことと言えよう。以上、十種の中央公演、三種の地方公演が、ことしの芸術祭主催公演であった。

協賛公演 七種の協賛公演を行なった。吾妻徳穂「恋三趣」の邦舞公演をはじめ、第七回国家指定芸能特別鑑賞会、声明公演、「管絃法要」、「女流邦楽鑑賞会」、雅楽公演「蘇志摩利」、文楽公演等、いずれも格調高い公演が選定されて芸術祭を色どった。

参加公演 参加総数は前年度と同数の一九七公演(作品)であった。実演芸術の諸部門はこの傾向として参加者がキャリアにとむ人たちにしぼられた感じがある。これは芸術祭に対する意欲の高まりを示すものと考えられる。またテレビ部門は前年度二十作品(うち地方の民放局九作品)に対し二十四作品(うち地方の民放局一三作品)にのびており、地方参加の道をひらいたこともあるが、地方局の熱意が高まってきたことを示している。

△第二十六回芸術祭総覧抄録▽

芸術祭の刷新充実をはかるために第二四回に開催要綱等の大幅な改正を行なってからことしで三年を重ねたが、この改正の実績は着々とあがりつつある。すなわち、主催公演を十月前半に集中させたことで、芸術祭のフェスティバル的性格が強く打ち出されたし、参加期間を短縮したことが、必然的に参加の水準を引き上げる効果をもたらした。また、協賛公演の制度が設けられたことによって、芸術祭は一段と多彩な内容をもったものとなり、芸術の一大祭典たる盛り上がり次第に見られるようになってきた。

ここで特に記述しておきたいことは、長年念願としていた「移動芸術祭」の計画がことしから漸く実現発足を見たことである。これは全国四か所(ことしは埼玉・兵庫・岡山・福岡の各県)を移動芸術祭開催県に指定し、中央から派遣するすぐれた舞台芸術の公演をそこで集中開催するとともに、その機会を利用して派遣舞台芸術の巡回公演を全国的に行ない、地方における芸術鑑賞の機運を醸成して芸術文化の進展に寄与しようとするものである。このために本年度八、五〇〇万円の予算が新たに計上さ

れ、六種目の公演が全国三十県にわたる広範な諸都市で開催された。その内訳は、文楽七都市（公演回数一四回）、歌舞伎十七都市（三三回）、新劇十六都市（十六回）、交響楽十一都市（十一回）、オペラ十都市（十回）、バレエ十一都市（十一回）、合計七都市延九四回の公演となっている。これまで文化庁芸術祭が毎年行なっていた主催公演の地方巡回事業は、この画期的な「移動芸術祭」によって肩代りされたわけであるが、草創以来芸術祭が歩み続けた道程をいまかえりみて、ひとしお感慨深いものがある。

主催公演 とくにことしは、委嘱作品に重点が置かれ、祝典の際の合唱曲をはじめ、交響楽・邦舞・洋舞の各公演で、計七本の委嘱作品が発表された。すなわち、幕開きの「芸術祭祝典・合唱の夕べ」で「風のうた」（大中恩曲）と「合唱のためのコンポジション」第八番（間宮芳生曲）の二曲が、「管弦楽の夕べ」では「オーケストラのためのラプソディ」（芥川也寸志曲）が、「創作邦舞公演」では「とりあげ狸」（宇野信夫作、杵屋六左衛門曲、藤間勘右衛門振付）および「咒群」（吉永淳一作、杵屋正邦曲、花柳寿楽振付）の二作品が、また「バレエと現代舞踊の夕べ」では「ユキオンナ」（日下四郎作、折田克子演出・振付）と「あくがれもつけ」（岡本一彦作、石田種生演出・振付）が、それぞれ華々しく初演されたのである。いずれも各分野ですぐれた業績をあげられている方々が、前年度から想を練ってこられたものであり、秋の芸術界に大きな話題と刺激を与えたが、これら委嘱作品の上演にあたっては各分野の名作・名曲がプログラムに組みこまれ鑑賞者を魅了した。

以上のような委嘱作品を中心とした公演のほか、はじめて芸術祭に室内オペラをとりあげて、東京室内歌劇場のメンバーによる「オルフェオ」（モンテヴェルディ曲）を上演した。これは恵まれぬ舞台条件にもかかわらず意欲溢れる舞台成果により大方の好評を博した。また名作能・名作狂言を中心とした曲目で組まれた「芸術祭能」が三夜にわたって実施された。映画では、参加規程の一部を改め新構想のもとに「芸術祭参加映画特別鑑賞会」（入場無料）を連続五日間（十回）にわたって開催したが、これは未封切の外国劇映画参加作と、日本の記録映画参加作との併映をはかったもので、大きな反響を呼んだ。また恒例の「映画の歴史を見る会」（名作無声映画の説明と伴奏つき上映）（入場無料）もことし十八回目を迎え、ひろく映画愛好者層から喜ばれた（この公演は芸術祭関連行事として山梨県（甲府市）においても実施した）。このほか前年に引き続き「映画芸術劇場」がハ文芸映画名作選Vのテーマで催され、これも予想を上回る入場者をみた。

協賛公演 十二種の協賛公演を行なった。十月、十一月の「歌舞伎公演」、「声明公演」、「女流邦楽鑑賞会」、「邦舞公演」、「文楽公演」、「雅楽公演」など七種の国立劇場自主公演と、「吾妻徳穂花三趣の会」、「武原はん秋の会」、「東京五流能」、二期会オペ

ラ「ホフマン物語」、「読売日本交響楽団特別演奏会ハ武満徹の夕べ」が選定され、いずれも格調高い公演として芸術祭をいろどった。

参加公演 参加総数は一九六公演で、ほぼ前年と同数であった。実演芸術の諸部門の傾向としては、次第にキャリアに富む人々によって占められてきた感がある。またラジオ・テレビ部門は、民放東京キー局の参加意欲の不振が目立ち、参加数もかなり減少の傾向を示したが、地方局の積極的参加熱意によって辛うじてしのいでいる現状がうかがえた。顕著な参加増を見た外国映画部門は、ことし参加規程の一部を改め参加のできやすいような配慮がなされた結果がこの盛況を見たものである。

参加規程の一部改正 「主催公演」の項で触れたように、外国映画の参加資格に関して規程を改正し、従来の「芸術祭期間中にはじめてロードショウまたは一般封切りされるもの」のほか、「十一月十六日から翌年三月三十一日までの間に封切りされる」とが確定している作品で、主催公演において上映されるもの」も参加作品として取扱うようにした（規程二の②のイの④参照）。外国映画はこれによってこれまでロードショウの延長等の事情により、封切りが不確定であった作品も翌年三月末日までに上映されることが確定しているものは、新たな企画によった主催公演「参加映画特別鑑賞会」で一回上映する条件を課して参加が認められることになったのである。このほか、従来は内規として規定に表わさなかった演劇部門の参加資格のとりきめを規程で明記することとした。（規程二の②のアの⑦および⑧参照）。

△第二十七回芸術祭総覧抄録▽

主催公演 九種的主催公演を行なったが、ことしも委嘱作品に重点が置かれ、バレエ、オペラ等の三公演において計六本の委嘱作品が発表された。まず、邦楽と洋楽の対比と融合を試みる意欲的合演演奏による「邦楽四人の会十蔵本真理弦楽四重奏団の夕べ」で「八重奏曲」（平吉穀州曲）と「トルス四一八重奏曲のための一」（三善晃曲）の二曲が、また「芸術祭バレエ公演」では「海」（関直人振付）、「ゲッタン人の踊り」（小林恭振付）および「幻想交響曲」（島田広振付）の三作品が、「創作オペラの夕べ」では「蒼き狼」（井上靖原作・高田三郎台本作曲）が、それぞれおおかたの話題と期待をこなして華々しく発表されたのである。いずれも各分野ですぐれた業績をあげられている方々が、数年前から想を練ってこられたものであり、秋の芸術界における大きな収穫として高く評価された。とくに本年度芸術祭の特色としてここに記述しておきたいのは、海外各地で現在めざましい活躍をしている邦人芸術家を主催公演の機会に招聘し、そのすぐれた技芸を披露していただくための新規事業がことし

らはじめられたことである。これによって、上記「バレエ公演」には在フランスの久保田紀子氏（バレリーナ）を、「創作オペラの夕べ」には在ローマの松本美和子氏と在ドイツの春日成子氏（アルト）を、また幕明きの「芸術祭祝典・オーケストラの夕べ」（読売日本交響楽団出演・入場無料）には同じく在ドイツの飯守泰次郎氏（指揮者）をそれぞれ一時帰国してもらい、公演成果に大きく寄与し得たのであった。

以上の公演のほか、前年度の主催公演に出演し好評を得た東京室内歌劇場のメンバーが室内オペラ「真夏の夜の夢」（ブリテン曲）を上演し意欲溢れる舞台成果で再び絶賛を博した。また、日本の伝統的な芸能の主催公演では、名作能・名作狂言により編成された恒例の「芸術祭能」を三夜にわたって実施するとともに、国が重要無形文化財保持者として認定した方がたを一堂に会させ、その至芸を披露していただくための「国家指定芸能特別鑑賞会」が開催され、それぞれすぐれた伝統芸能の真価を紹介することができた。映画では前年度に引き続き「芸術祭参加映画特別鑑賞会」（入場無料）を連続六日間（十四回）にわたって開催したが、これは未封切の外国劇映画参加作と、日本の記録映画参加作との併映をはかったもので、入場者は前年度を上廻る盛況を見せ大きな反響を呼んだ。また恒例の「映画の歴史を見る会（名作無声映画の説明・伴奏つき上映）」（入場無料）もこの十九回を迎えたが、若くして逝った伝説的二枚目ヴァレンティノの代表作二本の併映などの企画が映画愛好者層から歓迎された（この公演は芸術祭関連行事として高知県宿毛市においても実施した）。

協賛公演 九種の協賛公演を行なった。十月、十一月の「歌舞伎公演」、「声明公演」、「女流邦楽鑑賞会」、「文楽公演」、「雅楽公演」など六種の国立劇場自主公演と、「吾妻徳穂」歌人三題の会、「珠実会公演」、「長門美保歌劇公演」が選定され、いずれも格調ある公演として芸術祭をいろどった。

参加公演 参加総数は一六三公演（下表）で、前年より二五公演（作品）の減をみたが、内容的には充実した公演（作品）がそろっていた。実演芸術の諸部門の近年の傾向としては、次第にキャリアに富む人々たちによって占められてきた感が強い。またラジオ・テレビ部門は、相い変らず民放東京キー局の参加意欲の不振が目立ち、参加数もさらに減少の傾向を示したが、一方、地方局の積極的参加熱意によって辛くもしのいでいる現状がうかがわれる。盛況を見た外国映画部門は、前年度に参加規程の一部を改めて参加のできやすい配慮が講じられたことが、本年も好結果を生んだものである。レコード部門の国内盤にみる減少は、業界の不況と企画面に足踏みの状況がうかがわれたことが一因となっているようである。また、日本劇映画の参加が本年度の規程から除かれたが、これはことしから日本劇映画の振興に資するため、優秀な作品を選び、その製作者に対して国が奨励金を交付するという制度（優秀映画製作奨励金）を発足実施することになったので、芸術祭大賞等の授賞制度との関連重複を避ける意味での措置である。

参加規程の一部改正 本年度は前記日本劇映画に関する参加の条項が除かれたほかは、とりたてて特記すべき改正はなかったが、レコード部門関係で参加の条件に「参加作品はディスクレコードに限るものとする」および「4チャンネル方式によるレコードの参加は認めない」旨を明記した（規程二の(2)の(イ)参照）。これはレコードの範ちゅうが近年拡大され、フオノ・シートあるいはカセットテープ式の製品もレコードとして扱われることにかんがみ、現状では録音技術面での完成度の高いディスクレコードにのみ限定することをはっきりと明示したものであり、また4チャンネル方式レコードも現状ではその製品の規格が統一されていないことで認めないこととしたのである。

△第二十八回芸術祭総覧抄録▽

主催公演 十月一日恒例の芸術祭開幕の祝典を皮切りに、十月十三日までの間に計九種目の主催公演を開催した。ことしも委嘱作品を数多く揃えたこと、海外で活躍する邦人芸術家の招聘をはかったこと、また、大衆芸能部門では特に企画の想を練って画期的なプログラムを組むなど、多彩な主催公演を展開した。

まず、芸術祭祝典「雅楽の夕べ」では、国の重要無形文化財に指定されている宮内庁楽部の出演を得て、名曲ばかりを選定し、国立劇場に約一、五〇〇人を無料招待した。日本バレエ協会の「眠れる森の美女」全幕は、主催公演のあと、移動芸術祭の巡回公演として全国六か所を巡演した。モダンダンスの部門では、レナード・バースタイン作曲「ミサ曲」の舞踊化をはかり、日下四郎に台本を、庄司裕氏に振付・演出を委嘱した。これの舞台には現在アメリカのマーサ・グラーム・カンパニーの第一舞踊手として国際的に活躍する浅川高子氏を招聘して充実した舞台成果を示した。「芸術祭能」では、東京での演能は珍しい金剛流の「海人」とワキ方の重習の大曲「壇風」、それに人気曲「井筒」と狂言三本で、期待に違わぬ三日間の演能会となった。「芸術祭邦楽公演」は、芸術祭受賞者によって古典・準古典・新作とバラエティに富んだ番組を仕立て、歌舞伎舞踊や上方舞の本領がみごとに表現された。現代邦楽のジャンル「日本音楽集団演奏会」は、そのサブタイトルに「伝統楽器のさまざまな組合せによる」とうたい、伊福部昭作曲「郎曲 豊多々良」、入野義朗作曲「日本楽器のための・逍遙」（以上創作委嘱曲）ほかの曲目構成で、値しは盛会であった。「芸術祭参加映画特別鑑賞会」は本年度参加の未封切映画（日本二、外国十一、計十三本）と

記録映画(十三本)を併映し、六日間にわたり、毎一回、三〇〇人を無料招待して盛況を呈した。また、製作準備段階から相当の話題を呼んだ大衆芸能「寄席忠臣蔵」は、この部門の芸術祭受賞者をすくって、仮名手本忠臣蔵の世界を寄席芸によって再現しようという画期的な試みで、この秋の芸術界の大きな収穫のひとつとして評価された。主催公演のフィナーレは、創作オペラ「伽羅物語」で、これは戸田邦雄氏に台本・作曲を委嘱し、また、バリトンの吉江忠男氏(西独を中心にヨーロッパ各地で、主として宗教音楽のソリストとして活躍)を帰国招聘し、舞台の成果に対しては大きな反響を呼び、さまざまな話題を提供する公演となった。

協賛公演 八種目の協賛公演を開催した。新派「婦系図」「邦楽―上方の芸・江戸の芸」「雅楽―現代雅楽曲と伝承曲―」歌舞伎「江戸城総攻」文楽「国姓爺合戦・冥途の飛脚」の五種目の国立劇場自主公演と劇団雲公演「メナム河の日本人―山田長政―」、貝谷八百子バレエ団公演「マクベス」、それに吾妻徳徳「春夏雪三趣の会」の八種目が選定・委嘱され、いずれも風格のある公演として芸術祭を彩った。

参加公演 参加公演数は一九八公演(作品)で、前年にくらべ三五、前々年にくらべても十公演(作品)の増をみて、一段とはなやかな参加公演がくりひろげられた。内容的にも充実したものが多く、個人・団体とも新進気鋭のグループとキャリア組がそれぞれ覇を競うというかたちになった。また、ラジオ・テレビ部門では、民放地方局の積極的な参加がさらに望まれた。映画部門の日本劇場画については、昭和四十七年度から優秀映画製作奨励金の交付制度が発足し、これに伴ない芸術祭賞の授賞との関連重複を避けるため、四十七年度は参加規程から除いた。しかし、斯界からの強い要望があり、ことしからは再び参加することになった。(ただし授賞の対象としない)。

△第二十九回芸術祭総覧抄録▽

第二十九回を迎えたことしの芸術祭は、主催・協賛・参加の公演それぞれ多彩な内容を繰りひろげた。主催公演ではポピュラー・ミュージックの世界がはじめて取り上げられて話題を呼び、また、協賛公演ではこれをはじめの狂言が指定・委嘱されるなど、バラエティに富んだ公演が開催された。また、参加公演では全般的に参加件数が増加し、特に能楽、大衆芸能、テレビ部門が例年にくらべてめだち、とりわけテレビでの民放各局の活躍となった。また、ことしから賞金額が増額され芸術祭大賞(賞状・賞牌及び賞金二十万円)又は芸術祭優秀賞(賞状・賞牌及び賞金十万円)となった。

主催公演 芸術祭祝典「現代邦楽の夕べ」では、日本音楽集団の出演を得て、国立劇場に約一、五〇〇人を無料招待した。恒例の「芸術祭能」は、配役の妙を得た「通小町」を中心に金春流宗家の「国栖」、喜多流の名手による「天鼓」と狂言の和泉・大藏各流の長老の出演を得て、興趣の深い催しとなった。「ミュージック・フュスティブル―日本のリズム・世界のリズム―」は、ラテン音楽の見砂直照と東京キューバン・ボーイズを中心に、日本の民俗音楽の再発見と世界のリズムの淵源を再発掘して紹介する試みで、ポピュラー界の注目を集めた。室内オペラ「検校官」は、ゴーゴリの名作のオペラ化で、本邦初演の興味は大きく、また、西内玲氏(婦園招聘)が舞台に花を添えてくれたことも話題となった。「三曲の夕べ」では、邦楽特に三曲関係で昭和四十七年度までに芸術祭賞を受賞した人びとによる演奏会で、邦楽分野でのこうした企画は今日までに例がなく、画期的な催物となった。糸あやつり人形芝居「おんによる盛衰記」は、木下順二氏自身の脚色本をテキストに、結成人形座と緒形拳氏、文楽座の出演を得て、鶴澤燕三氏の作曲(委嘱)で上演。この企画のユニークさが人気を呼んで三回公演とも満員となり、新聞評等も好評であった。「芸術祭参加映画特別鑑賞会」は、本年度芸術祭参加の未封切劇場画(日本三、外国十、計一三作品)と記録映画(一四作品)を併映し、七日間にわたり毎一回、三〇〇人を無料招待して盛況を呈した。バレエ「くるみ割り人形」は、チャイコフスキー記念東京バレエ団による上演で、この公演のあと移動芸術祭巡回公演として全国六か所を巡演した。「郵葉四人の会十読売日本交響楽団の夕べ」は、邦楽と洋楽つまり邦楽器とオーケストラの融合から生まれる新しい音楽の創造を企図したもので、池辺晋一郎氏に作曲委嘱した「クワドランツ―邦楽器と管弦楽のために―」が初演されるなど、さまざまな話題と反響を提供する演奏会となった。

協賛公演 国立劇場自主公演のうち新派「日本橋」、「邦楽鑑賞会―上方の芸・江戸の芸―」、雅楽「番舞」、「京舞」、歌舞伎「戦国流転記」、声明「開山法要」の六公演と貝谷八百子バレエ団公演「ジブシー男爵」、花柳音楽発表会(「鼓の影」他)、それに野村万蔵喜寿祝賀会(狂言「未広かり」他)の計九種目が選定・委嘱され、いずれも風格のある公演として芸術祭に一段の彩りを添えた。

参加公演 参加公演(作品)総数は二一四件で、前年にくらべて一六、前々年にくらべると五一公演(作品)もの増をみて、一段とはなやかな参加公演が繰りひろげられた。内容的にも充実したものが多く、また、舞台芸術関係では関西からの上京参加公演もあって気を吐いた。また、ことしはテレビ部門で、民放各局の積極的な参加があり、高い水準を示すとともに優れた成果をあげた。

第三十回芸術祭

△芸術祭発足三十周年記念▽

この年の芸術祭は三十周年の記念の年にあたり、芸術祭の期間を半月延長して二か月とし、この間、主催、協賛、参加公演と、記念にふさわしい多彩な内容を展開した。

まず主催公演においては、十月一日恒例の芸術祭祝典に、皇太子同妃両殿下の御臨席をあとで記念式典を挙行、このあと、当代各流の舞踊家の出演を得て、古典、準古典、新作と揃えて上演、特に三十周年の記念の意味をこめて発表した「松虫抄」は、萩原雪夫作、杵屋六左衛門作曲の依囀作品で、花柳寿楽演出・振付、出演で話題をよんだ。

創作委囀作品として榎本滋民氏による新作歌舞伎「大江山鬼神草子」は、大江山鬼退治を推理し、そこにロマンとスペクトルをくりひろげるといった趣向のもので、中村扇雀、市川染五郎、中村富十郎、片岡仁左衛門、中村又五郎等によって盛り上った芝居をみせた。

「芸術祭参加映画特別鑑賞会」はすでに恒例となっている催しだが、本年度芸術祭参加の未封切映画と日本記録映画を併用し、入場無料で公開した。また芸術祭寄席「東西いろは歌留多」は、三田純市氏に構成、演出を依頼し、東西のいろはかるたをテーマに、江戸と上方、東京と大阪の人情、風俗、風土のちがいや類似を、当代の芸達者たちに

よって描き出した。

「芸術祭能」は、日本芸術院会員、重要無形文化財保持者（人間国宝）、芸術祭賞受賞者等を中心に、人気曲を選んで番組を組んだ。

やはり委囀作品のひとつ新作オペラ「ちゃんちき」は團伊玖磨氏の作曲で、氏がながく構想をあたためていたものであり、狐と鰐（かわうそ）を擬人化し、メルヘンの世界を現出しながらも、そこに自然と人間に対する文明批評の眼をもたせたものであった。

日本音楽の流れ「語りもの」は、日本の伝統芸能とりわけ音楽、歌謡の中で重要な要素となっている語りものの系譜を歴史的、地理的にたどった企画で、声明にはじまり節談、浪花節などに到る興味深い公演として、芸術祭のなかでクリーン・ヒットされたものである。

「オーケストラの夕べ」は、メルボルン交響楽団首席指揮者をつとめる岩城宏之氏が十年ぶりに読売日響で指揮をとり、芸術祭受賞作品などを演奏した。また「創作舞踊二人展―モダン・ダンスの夕べ」は、これまた委囀作品として、福田一平作、宇野誠一郎作曲による、民俗信仰の世界を背景に現代人の心象を描く創作舞踊を発表した。また同時に藤井公氏に昭和四十五年度芸術祭優秀賞受賞作品「癒えぬ川」を再演してもらったが、藤井、福田は両氏とも文化庁派遣の芸術家在外研究員として、アメリカ、ヨーロッパ各地で研修、その成果の一端を披露する意義ある公演でもあった。

また真帆志ぶき、細川俊之等によるミュージカル「ヴェローナの恋人たち」は、シェクスピアの原作をミュージカルに翻案したもので、ブロードウェイでヒットしたのだが、芸術祭公演と同時に、秋の移動芸術祭として、全国十五会場もあわせ公演した。バレエ「椿姫」はアメリカのバレエマスター、ウィリアム・ダラー氏の演出、振付により、大原永子を中心に牧阿佐美バレエ団が総力をあげて取り組み、みごとな成果をあげた。

今年は芸術祭三十周年記念とあって、協賛公演も大幅に件数をふやし、計二四種目の協賛公演を依頼したが、このなかには海外からの来日芸術家（団体）の四件も含まれ賑わいをみせた。

△アジア民族芸能祭▽

この年の最大のよびものは「アジア民族芸能祭」であった。これは昭和四十三年、明治百年記念芸術祭のうちに一度開催され、国の内外から高く評価された芸術文化交流の一大事業であったが、今回はその規模、内容をさらに充実させ、芸術祭三十周年記念として、また共催の日本放送協会の放送開始五十周年記念として行われたもので、NHKホール八日間にわたって公演されたほか、NHKテレビを通じて計三回にわたり全国放送されたものである。

出演団体は、韓国国立国楽院、タイ王立舞踊団、プリ・プムチュタン舞踊団（インドネシア）、フィリピン・ノーマル・カレッジ・バランガイ民族舞踊団、マレーシア国立舞踊団、ビルマ国立舞踊団、そして日本からは宮内庁式部職楽部の舞楽および日本民俗芸能協会の津軽じょんがら節ほか、石川県の名舟御陣乗太鼓、さらに中村勘三郎、勘九郎による歌舞伎舞踊「連獅子」が参加し、アジア民族芸能の一大祭典をくりひろげた。

△第三十回記念芸術祭総覧抄録▽

ことは芸術祭発足三十周年の記念の年にあたり、芸術祭期間も半月延長して二か月とし、この間、主催・協賛・参加公演ともそれぞれ記念公演にふさわしい多彩な内容が繰りひろげられた。特に、アジア各国からその国の代表的な民族芸能団を招へいして開催した「アジア民族芸能祭」は、この秋の最大の話題を呼ぶ公演のひとつになった。また、他の主催公演でも新作歌舞伎をはじめオペラ、バレエなど意欲的な数々の作品が発表されるとともに、協賛公演では芸術祭期間中の優れた公演二十件と、こゝとはじめて海外からの来日芸術祭（団体）四件の公演もあわせて指定委嘱された。また、参加公演（作品）では、全般的に参加件数が大幅に増加し、特に音楽・舞踊部門では例年ない盛況ぶりを呈した。また、賞金が増額され、芸術祭大賞（賞状・賞牌

及び賞金三十万円）又は芸術祭優秀賞（賞状・賞牌及び賞金一五万円）となった。

主催公演 十月一日恒例の芸術祭開幕の祝典は、皇太子同妃両殿下の御臨席のもと、今日出海、中村歌右衛門氏などを迎えて記念式典を挙行、このあと「日本舞踊の夕べ」をもって芸術祭が開幕された。ことしの主催公演では、特に創作委嘱の面にも新鮮さを示し、萩原雪夫・杵屋六左衛門氏に舞踊「松虫抄」を、榎本滋民氏に新作歌舞伎「大江山鬼神草子」を、岡伊久磨氏には新作オペラ「ちゃんちき」の作曲、福田一平・宇野誠一郎氏にはモダンダンス「祭儀」をそれぞれ委嘱して発表し、おおかたの好評を博した。また、指揮者若城宏之氏には、芸術祭受賞作品等の指揮を依頼し、一方、ヨーロッパで活躍中の舞踊家泉勝志氏には、福田一平作品に出演を依頼し、それぞれ芸術祭のために一時帰国を願って、演奏会や舞踊公演に花を添えてもらった。主催公演の各々について更に述べると、まず、芸術祭祝典ののりの「日本舞踊の夕べ」では、当代第一線で活躍する各流の舞踊家の出演を得て、古典・準古典・新作と名品を揃えて上演。特に芸術祭三十周年の記念の意味を含めて発表した新作松虫抄は、杵屋六左衛門氏の優れた曲と花柳寿楽氏の演出・振付・出演の活躍が話題になった。新作歌舞伎「大江山鬼神草子」は、例の有名な、大江山鬼退治のはなしの真実はどうであったかを推理し、ロマンとスペクタクルで繰りひろげる新鮮な歌舞伎芝居で、中村扇雀、市川染五郎、中村富十郎ほかの人気俳優が情熱をもやして取り組み、さらに片岡仁左衛門、中村又五郎らがこの芝居を盛りあげた。また、本格的な歌舞伎を執筆し、その演出にあたった榎本滋民氏は、昨今の創作界でめきめき名作をものし、今回の登場も演劇界の待望するところであったが、期待をはるかに上回る成果をあげ得た。「芸術祭参加映画特別鑑賞会」は、すでに恒例となっている催しで、本年度芸術祭参加の未封切映画と日本記録映画を併映して、広く一般の鑑賞に供した（入場無料）。芸術祭寄席「東西いろは歌留多」は、上方の芸能に造詣の深い三田純市氏に構成・演出を依頼し、東西のいろはかるたをテーマに、当代一流の芸達者を揃え、江戸と上方あるいは東京と大阪の人情、風俗、風土の相違と類似を描き出して成功。恒例の「芸術祭能」は、例年の番組仕立てとは趣を少しかえ、日本芸術院会員、重要無形文化財保持者、芸術祭受賞者他を中心に人氣曲を選んで番組をつくり、広く一般に楽しみながら能楽の鑑賞ができるように配慮がなされた。新作オペラ「ちゃんちき」は、岡伊久磨氏がながらく構想をあたためていたもので、台本（水木洋子作）は狐と狸（かわうそ）を擬人化してメルヘンの世界を現出しながら、なお背景には自然や人間に対する文明批評の眼がひかっていた。演出は、オペラ「夕鶴」など的確な技量を示した小田健也氏で、民話的な手法を避けて現代性を生かす演出は、高い評価を受けた。日本音楽の流れ「語りもの」は、こゝとしての芸術祭のクリーンヒットと論評されたもので、日本の伝統芸能とりわけ音楽・歌謡のなかで重要な要素となっている「語

りもの」の系譜を歴史的・地理的にたどつてみる企画で、声明にはじまって節談、浪花節などにひろがる過程を興味ぶかく展示した。「オーケストラの夕べ」は、現在メルボルン交響楽団の首席指揮者をつとめながら、国際的な活躍を続ける岩城宏之氏の指揮で、芸術祭受賞作品を中心に、現在、世界の音楽界で評価を高くしている作品をとりあげて演奏。岩城氏は、読売日響で指揮棒を振るのは十年ぶりのことで、その組み合わせは好評であった。「創作舞踊二人展—モダン・ダンスの夕べ—」は、現代舞踊の分野で名実ともに第一線で創作活動を続ける藤井公、福田一平氏に登場を願ひ、藤井氏には昭和四五年度芸術祭優秀受賞作品「愈えぬ川」の再演を、福田氏には民俗信仰の世界を背景にしながら現代人の心象を描く作品を創作委嘱、その音楽を宇野誠一郎氏に依頼した。藤井、福田両氏は文化庁派遣の芸術家在外研修員として、アメリカ、ヨーロッパ各地で研修、その成果の一端を披露する公演でもあった。ミュージカル「ヴェローナの恋人たち」は、シェイクスピアの原作をミュージカルに翻案したもので、ブロードウェイでは高い評価を受けてヒットし、日本では、五十年五月に初演され話題を呼んだ。芸術祭公演と同時に秋の移動芸術祭公演として全園一五会場もあわせ巡演した。バレエ「椿姫」は、A・デュマの原作をバレエ化したもので、今回は、ウイリアム・ダラー氏（ニューヨークのメトロポリタン・オペラ・バレエ団で活躍、現在アメリカのバレエマスター・振付師として世界各国で活躍中）の演出・振付のもと、大原永子氏を中心に牧阿佐美・バレエ団が総力をあげて取り組んだ。「椿姫」はオペラとして我が国でもよく上演されるが、今回のバレエでは、ヴェルディの初期作品をビクアップしてその音楽とし、オペラとはまた趣きを異にした「椿姫」として、各界から期待されたがよくそれに応え、みごとな成果をあげた。

以上のように、ことしの主催公演種目はそれぞれ、さまざまな話題と反響を提供したもののだが、さらに国際的な行事として興味と関心の寄せられたのは、「アジア民族芸能祭」である。これは昭和四三年、明治百年記念芸術祭のおりにも開催されて、内外から高く評価された芸術文化交流の一大事業で、今回はさらにその規模、内容を充実させた企画で実施することができた。このたびは特に放送開始五十年周年記念の年を迎えた日本放送協会との共催で開催され、このときの舞台は、NHKテレビを通じて計三回にわたり全国に放送された。

協賛公演 ことしは芸術祭三十周年記念の意味もあって、例年より大幅に件数をふやし、計二十四種目の協賛公演を委嘱した。このなかには、海外からの来日芸術家（団体）の四件も含まれ、記念公演としての賑わいをみせた。これらの公演はいずれも風格のある重量感あふれる傑作として、芸術祭に一段の彩りを添えたものである。

参加公演 参加公演（作品）の総数は二五三件で、前年にくらべ三九、前々年にくらべると六五件の増をみて、一段とはなや

かな参加公演が繰りひろげられた。これは芸術祭期間を半月延長したことにもよるが、それよりも芸術祭三十周年記念に際しての、参加者の強い意欲のあらわれとみてよからう。それは内容的にも充実したものが多かったことでもよくわかる。また、個人、団体ともに新進気鋭組とキャリア組がそれぞれ覆を窮うとともに、地方からの上京公演、あるいは地方放送局の活躍が特にめだったのは、喜ばしいことであった。また、ことしからレコード（外国盤の部）に録音楽、ポピュラー分野の参加が認められ、優秀な作品の参加があったが、この方面は今後ますます盛んになることが予想される。

芸術祭もすでに三十年。人の齢でいえば、而立の年である。朝日新聞（昭和五十年十月十六日付）は『30年目の芸術祭』と題し、「なんだかんだといわれながら、とうとう第三十回を迎えた芸術祭。団が首領をとる態で、これだけ批判され、予算面でも虐待され続けた行事も珍しければ、また、それに耐えてしぶとく生き残ってきた例もあり聞かない。三十歳といえば人間なら働き盛りの壮年期。幼少年期はいびられ通し、青年期には相手にされず……、といった生いたちを振り返ると、少々まずいじめの感さえあるが、昨今やや見直しムードの出で来たこともたしかである。」という見出し文で、芸術祭の現状の一面と将来について語った。そして「三十歳にもなれば、金を出さない色男面から、金を出しても口は出さない頼もしさへの変身をそろそろ考えてもよい年齢だろう。」と。

芸術祭は、長い年月の間、さまざまな批判とともに成長してきたともいえる。今後五十年、百年を経るにしてもそうであろう。しかし、芸術祭という機会と場が、常にそのときどきの芸術・文化に刺激を与えるとすれば、それだけでも存在の理由は十分にある。要は、その機会と場をいかに活用するかにかかっているといえよう。否定論でなく、建設的な批判、批評をもって、「芸術祭」を活用していくことを考えるべきときではないだろうか。（北條 明直）

編集後記

昭和五十年度（第30回記念）芸術祭は、国立劇場における祝典に皇太子同妃両殿下をお迎えして開幕し、以後約二か月にわたり、「アジア民族芸能祭」ほか多彩な公演をくりひろげ、華やかなうちにも創造の意欲にみちた芸術の大祭典として、盛況のうちに幕を閉じました。

一方、この三十周年を記念する事業のひとつとして、『芸術祭三十年史』の編纂を企画し、発足以来の芸術祭の歩みをふり返り、その資料を整備し、今後の芸術祭発展に資することを考えました。すでに『芸術祭十五年史』が刊行され、芸術祭の歴史の流れにひとつの折目をつけておりましたが、昭和五十年十二月十五日の編纂委員会で、このたびは後期十五年に重きをおきつつ、なお芸術祭の通史となるように編纂することがきまりました。

本書の構成は、本文編及び資料編上・下の全三巻とし、後期十五年にウエイトをかけながらも、三十年の歴史を集約いたしました。まず、本文編は、芸術祭三十年の歩みを概観し、各部門ごとにその流れを跡づけるとともに、芸術祭関係者から寄せられた随想を収め、さらに芸術各界評論家の方々による座談会をもって構成しました。随想や座談会では、芸術祭の裏面史、側面史的な挿話や貴重な御意見などが盛り込まれております。また、資料編上・下は、芸術祭三十年を、編集上の便宜で、前期二十年（上）・後期十年（下）としてまとめました。

ともあれ、本書が多くの方々のご協力によって刊行されることでありますことを心から喜ぶものであります。

なお、本書の編纂にあたっては、編纂委員の諸先生に絶大な御協力を賜りました。あらためて深く感謝の意を表したいと存じます。また、本書の刊行に至るまで、芸術祭等の事務繁忙のなかを、田中英機技官はじめ芸術課員が文字どおり不休の努力を続けたことを付記してあとがきといたします。

芸術祭30年史本文編

発行日 昭和51年12月13日
編集者 文化庁文化部芸術課
発行者 文 化 庁
〒100 東京都千代田区霞が関 3-2-2
電話 03 (581) 4211 (代表)
印刷所 東京真宏印刷株式会社
